CITY in CITY

vol.30
2018
シティ・イン・シティ

2018
CITY in CITY volume 30
にぎわいの場をつくる

information

■ ホームページのご案内

当協会の活動内容、セミナー・研修会等のご案内を行っています。ご活用ください。

ホームページアドレス　http://www.uraja.or.jp/

■ 入会のご案内

当協会では、市街地の再開発等に携わる方々や住まいづくり・まちづくりに関心をもつ皆様に対し、市街地の再開発、住宅地区の環境整備、密集市街地の整備、マンションの再生等に関する様々な情報を提供するとともに、制度運用に関する相談・助言等を行っております。

当協会の趣旨に賛同される組織、団体の加入を歓迎いたします。会員には、機関誌「市街地再開発」（月刊）・広報誌「City in City」（年刊）の配布、各種研修会・セミナー等・頒布図書・刊行物の会員割引の特典が有ります。

■ 編集後記

「公共空間のデザインとマネジメント」をテーマとして、広場や道路など公共空間の「つくりかた」や「使いかた」に創意工夫をこらしている地区を取材してきました。各地で「にぎわいの場づくり」に取り組まれている方々のお話をお伺いして、あらためてデザインとマネジメントの連携の重要性を認識するとともに、公共空間をつくる過程で同時にマネジメントの担い手である人と組織が育つことを知り、まさに人づくり・組織づくりこそが持続的なまちづくりにつながるのだということに思い至りました。最後になりますが、取材その他でご協力いただきました皆様に、この場をお借りして御礼申し上げます。ご協力誠にありがとうございました。

（藤井潔、有馬啓人、今西聡、古川隆夫、梅原碧、北川直樹）

CITY in CITY
シティ・イン・シティ vol. 30
2018年３月25日発行

《発行》
公益社団法人全国市街地再開発協会
URBAN RENEWAL
ASSOCIATION OF JAPAN
〒102-0075　東京都千代田区三番町１番地５
石油健保ビル２階　TEL.03-6265-6691（代）
※本誌記事等の無断転用・転載は固くお断りいたします。

CITY in CITY

シティ・イン・シティ vol. 30

contents

鼎談

3
公共空間のデザインとマネジメント
出口 敦／山下 裕子／小野寺 康

事例ルポ

13 インデックス

14
● CASE -1
りんご並木周辺（長野県飯田市）
まちづくり会社が主体となった中心市街地再生の取組み

16
● CASE -2
虎渓用水広場（岐阜県多治見市）
先人の偉業を受け継ぎ駅前広場に再建して交流拠点に

18
● CASE -3
天理駅前広場コフフン（奈良県天理市）
子供たちを呼び込む駅前広場の空間デザイン

20
● CASE -4
ロープウェー街／大街道・銀天街／花園町通り（愛媛県松山市）
歩いて暮らせるまち にぎわいを創る都市デザイン

22
● CASE -5
久留米シティプラザ 六角堂広場（福岡県久留米市）
集客力の高い公共施設による中心市街地のにぎわい創出

Spot

24
北海道函館市
まちなみを活かした にぎわい創出イベント

Report

26
海外視察レポート
ドイツ諸都市における産業構造の転換に対応した
都市・地域再生について
デュッセルドルフ／デュイスブルク／エッセン／ドルトムント／フロイデンベルク／ケルン／マールブルク／フランクフルト

File

30 最近の市街地再開発事業等・優良建築物等整備事業

表紙写真：マルクト広場（ドイツ マールブルク）

鼎談

柏の葉アーバンデザインセンター（千葉県柏市）にて

公共空間のデザインとマネジメント

現在、全国で「公共空間や広場」の整備・活用が盛り上がりを見せている。
公共空間のデザインとマネジメントの最前線でご活躍されている専門家にお集まりいただき
実例に基づく手法や展望について語っていただいた。

出口 敦（でぐち あつし）

東京大学 大学院新領域創成科学研究科
社会文化環境学専攻 教授
柏の葉アーバンデザインセンター（UDCK）センター長

1990　東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻
　　博士課程 修了（工学博士）
1990　日本学術振興会・特別研究員
1992　東京大学工学部都市工学科・助手
1993　九州大学工学部建築学科・助教授
1998　九州大学大学院人間環境学研究院
　　都市・建築学部門・教授
2011　4月より現職
<主な著書>
「アジアの都市共生　21世紀の成長する都市を探求する」
（編著：九州大学出版会 2005年）
「都市美」
（共著：西村幸夫編著、学芸出版社 2005年）
「アーバンデザインの現代的展望」
（共著：渡辺定夫編著 鹿島出版会 1993年）
他、多数

山下 裕子（やました ゆうこ）

全国まちなか広場研究会 理事
ＮＰＯ法人ＧＰネットワーク 副理事長
ひと・ネットワーククリエイター／広場ニスト

1999　富山に移住し、演劇やアート関連イベントの
　　企画制作に関わる。
2007～ グランドプラザ運営事務所に勤務
2009　（財）地域活性化センター第21期
　　全国地域リーダー養成塾修了
2010～（株）まちづくりとやまグランドプラザ担当
2011～ NPO法人GPネットワーク理事
2013～ 全国まちなか広場研究会理事
2014～ まちなか広場研究所として独立。その後、
　　八戸・豊田・堺・神戸・明石・久留米を
　　はじめとする全国のまちなか広場に関わる。
<主な著書>
「にぎわいの場 富山グランドプラザ-稼働率100%の
公共空間のつくり方」（学芸出版社　2013年）

小野寺 康（おのでら やすし）

（有）小野寺康都市設計事務所 取締役

1987　東京工業大学大学院社会工学専攻 修了
1993　㈲小野寺康都市設計事務所 設立
<主な受賞>
2001　「門司港レトロ地区環境整備（北九州市）」
　　土木学会デザイン賞最優秀賞
2008　「油津堀川運河整備事業（日南市）」
　　グッドデザイン特別賞：日本商工会議所会頭賞
2009　「日向市駅 駅前広場（日向市）」
　　建築業協会賞：BCS賞
2009　「津和野本町・祇園丁通り（津和野町）」
　　土木学会デザイン賞最優秀賞
2010　「油津堀川運河（日南市）」
　　土木学会デザイン賞最優秀賞
2014　「道後温泉本館周辺地区（松山市）
　　都市景観大賞都市景観部門優秀賞
2017　「神門通り（出雲市）」
　　土木学会デザイン賞最優秀賞
他、多数
<主な著書>
「グランドスケープ宣言」（共著：丸善出版　2004年）
「GS軍団奮闘記　都市の水辺をデザインする」
（共著：彰国社　2005年）
「広場のデザイン　「にぎわい」の都市設計５原則」
（彰国社　2014年）
他、多数

まちに活力とにぎわいを創出する公共空間のつくり方

地域が求める公共空間のデザインとマネジメントに取り組む

出口　今日はお忙しいところ、ありがとうございます。今回の鼎談は、公共空間をテーマにして、そのデザインとマネジメントについて語り合っていただければと思います。

これまで市街地再開発事業等で色々な公共空間が生み出されてきましたが、そうした空間の役割が時代とともに変わってきています。近年の地方創生や都市再生の取組みの中で、改めて「公共空間」がそのマネジメントや公民連携の整備手法も含めてクローズアップされてきています。

駅前広場など公共空間のデザインに取り組まれている小野寺康さんと、広場など公共空間の利活用とマネジメントに実践的に取り組まれている山下裕子さんにお越しいただきましたので、魅力的な公共空間を生み出し育てていく意義や、まちづくりにおける役割、楽しさなどについて読者の皆様にお伝えできればと思います。

まずは自己紹介も兼ねて、小野寺さんからお願いします。

小野寺　私が心掛けていることは、住民の方々との議論、或いは地域の方々と一緒にものを作るということです。特に地域素材を使うところを経由して、デザインというものがきちんと地域に落ちている、地域の財産、資産になっている、その辺りの感覚を大事にして、今までやってきたかなというところがあります。

私のデザインの特徴は、一見デザインしたように見せない、というところです。例えば道後温泉の周りの施設（①参照）では、それまで車道だったところから車を追い出して歩行者空間に仕立て上げたのですが、伊予鉄道という市電の敷石をベースにして敷き詰めてみました。

出雲大社の参道の「神門（しんもん）通り」（②参照）では、参道ですので石畳にするのですが、元々石畳だった歴史はないのです。にもかかわらず道後温泉もそうですが、でき上がったときにあたかもずっと前からこうだったのじゃないか、と感じ取れるように仕立てたいと思いました。出雲大社は、京都を中心に伊勢神宮とセット（対極的な関係）で在るものなので、伊勢神宮の「おはらい町通り」と空間的にどうバランスするか意識しつつ、にぎわいやスタイルも含めて考えてデザインをしました。でき上がった後にご覧になったら、昔どうだったのか分からない仕上がりになっていると思います。公共空間で地域に何か元気や活力を与えるポイントがその辺にあるのではないかと、自分では思いながらやっています。

出口　デザインされた感がない公共空間。あたかも昔からそこにあったかのような公共空間ですね。

小野寺　そう、デザイン感を抜きたいんです。

出口　それでは広場ニストの山下裕子さん、自己紹介を兼ねてプロジェクトなどを紹介してください。

山下　広場ニストという言葉は、私が大好きなタモリさんにいつか出会えそうじゃない？って、広場研究会の仲間である若狭健作さんが命名してくれました。意味は広場の専門家というのではなく、広場を愛する人すべてだと思っています。

元々は今年10年を迎えた富山市のグランドプラザ（③参照）の開業スタッフを7年務めたことが始まりです。にぎわいを創出するための専属スタッフがいるような広場は、グランドプラザが先駆けだったと思います。

今は私が知る限りでは50地域くらいで専属スタッフがいる広場を作ったり作ろうとしていますが、私は3年前にグランドプラザを一旦卒業して、広場づくりの際に、広場が少しでもそのエリアの活力創出のために機能する「ひとの居場所」となり得るようなスタートアップを目指して、地域の方たちの伴走者をしているといったところです。

地域によって異なる背景や文化を感じながら、「こんなところが広場っぽいじゃないですか」といった気楽なところから広場的使い方というか、広場的感覚を様々なところにどうしたら盛り込み、取り込んでいけるのかというところに、今とても興味があります。

出口　最近まちづくりの議論の場で公共空間という言葉が以前よりもいろんなところで使われるようになっています。もちろん研究だけではなくて、実際のプロジェクトでも盛んに言われるようになってきましたけれども、その辺どうですか、皆さんお感じになっていますか？

公共空間を市民が交流する場に育てる

山下　公共施設ではなく公共空間というのがまずひとつポイントだと感じます。建物と建物との間のアクティビティが最近取り沙汰されていますが、その開かれた場所がたまたま広場や道路、公園だと、持ち主が行政組織であることが多いので、公共空間という言葉を使っているのかもしれないというところが若干気になっています。

グランドプラザは富山市の公共施設ですが「富山市まちなか賑わい広場」という正式名称を、グランドプラザの中には全く表示していないのが特徴です。当時の担当課長が「ここが市の持ち物だと分かると硬くない？ハードルが上がらない？」と、あえて表示しませんでした。なんてことない、ただの場が在るという空気感をつくりたかったのです。

2年後にLRT（Light Rail Transit）のセントラム（市内電車環状線）が完成した時、グランドプラザの前にも電停ができたのですが、その際、富山市都市整備部の皆さんが、広場に隣接している百貨店の名前ではなく「グランドプラザ前」という広場の名称にされました。そうしたら一気に名前の知名度があがりました。場所はもう知られていましたが、「グランドプラザ前」という電停名になったことによって、グランドプラザという名前だと皆さん分かって。そのうちに「グラプラ」と4文字で言われるようになって。「グラプラ」と呼んでね、とは一回も言っていないのですが、後から愛称が自然に付いてきました。

出口　市街地再開発事業では、どうしても建物が主役と思われがちですが、実際にでき上がった空間を利用する市民の目線で見ると、むしろ広場のほうが主役で、その印象が記憶の中心にあったりするわけですね。広場や足元のオープンスペースのほうが身近なアクティビティに対しての需要が高いと言えるのかもしれません。そういう視点で公共空間が改めて注目されているということでしょうか。

小野寺　富山には結構行きましたけれど、皆さんグランドプラザの使い方が上手なんですよ。時にはワインバル（④参照）だったり、あるときにはギャラリーだったり、すごくいろんな使い方をしていて。

富山というのは冬寒くて雪も降るところなのですが、天井が高く、大きなガラスの箱という感じで、空間がシンプルで使い勝手がいいですね。使う人の感情を、たぶん山下さんが初期段階で相当捉まえて演出されたというのが道筋になっているのではないですか？

新たなオープンスペースが新たな都市文化を創り出す

出口　最初の仕掛けと、その後それを継続していくことといくつか、転換点というか、ご苦労されたところがあると思いますが。

山下　できた当初は空っぽの空間なので、今おっしゃっていただいたワインバルなど、こちらから仕掛けているのですね。富山は北陸で冬が長く寒くて雨が多くて雪が多い町です。年間の日照時間も少ない。そこにオープンエアーの素敵な空間ができました、テーブルもイスもあります、でも座る人がいませんでした。

そこで最初は、スタッフ自らがオフィスワーカーの格好で座って、パソコンで仕事できますよ、と使う人のフリをして、スターバックスに居るような気取った雰囲気を演出しました。

サクラ（偽客）はすごく大事です。いろんな地域で座る人がいないんですよと現場の嘆きを聞きますが、自ら座ったらいいじゃないですか、そこで起こしたい光景を自らやったらいいじゃないですか、と言うんです。人は人に寄ってくるものですから。よくあることですが、買ったことがないたこ焼き屋さんで人が並んでいなかったら、ちょっと勇気がいりますが、二人くらい並んでいるとおいしそうに見えて買うじゃないですか。人がやっていることが素敵だと感じると、人は入りやすくなる。なので、どこの町に行っても、ここに人が座ってないんですよ、という嘆きを聞くと、その方々と実際に座ってお茶を飲んだりします。するとあっという間に2～3組隣に座る人が出てきます。定着したら、皆さんどうぞって仕掛けた側は離れていけばいい。

富山では今はオープンエアの気持ち良さを皆さんが知っているので、お店の改修をする時、オープンエアにテーブルやイスを置いたり、駅前広場にも使いやすく整備された空間ができたりしています。以前はなかった光景が生まれていて、オープンエアで素敵に過ごされる文化が定着されているなと、気持ちの良い季節に富山を訪れるとても感じます。

出口　何かひとつの文化を生み出しているわけですね。

山下　ささやかなことですが、最近お盆時期

出口 氏

④グランドプラザ（富山市）
10周年前夜祭「カジュアルワイン会」

③グランドプラザ（富山市）
10周年記念事業「SOGAWA SOGOOD」

同右（整備前）

②出雲大社表参道：神門通り（出雲市）

同右（整備前）

①道後温泉本館周辺地区（松山市）

にグランドプラザに行った時、若い24歳くらいの大学を卒業して1年目か2年目の皆さんが、丸テーブルを3つほどくっつけて10人くらいでパーティーをしている光景に出合いました。私がスタッフをしていたときには見られなかったので、彼らがどういう風に終わるのか気になって遠目で見ていたら、きちんとゴミを片付けて、テーブルも直して、爽やかに帰ろうとしていたのです。思わずどうしてこんなことをしているんですかって話しかけたら、こういうことをしている人がいて、僕達もやってみたら気持ち良かったから、毎年お盆にはここに皆で集まってるんですと、おっしゃって。開業時から続けている毎月定例会であるカジュアルワイン会の効果かなと思いました。

出口 リピーターですね。

山下 規律というか、一定のルールというか、他人の気分を害さないように気を使って、気持ち良く元に戻して、ゴミを持って帰る。皆の場所であり、自分の場所として使っているんですね。そういう文化が育っているという実感を得て感動しました。

小野寺 それがまさに公共性ですね。

住民参加で実現する愛され育っていく公共空間

出口 今、公共空間が着目されていることを小野寺さんはどう捉えていらっしゃいますか。その背景などをお話いただけますか。

小野寺 確かに公共空間、公共施設というと、基本的に管理者が行政です。バブル前までは、行政が作って市民がそれを使うという、そういう関係性だったと思うのです。今は使いこなすことが当たり前のようになって、住民達が自分達の知恵でいかに使うか、という意識が高まっているように感じます。

例えば駅前の広場や中心市街地など、メインの公共空間たりえるところに資本投下しなければいけない、あるいはここはキモだ、というところでは、行政の方も積極的に地域の人たちの声を聞いて、一緒にやりましたと言いたい。

また、そうやって進めたほうが、できあがったときに地域の人が使う態勢ができあがっていますのでタイムラグがなく、完成してすぐ皆さん使い始める、ということが起きているのですね。そういうことがようやく伝わりつつあると思います。

出口 結果的にはその方が良いことを行政の人も分かっているのですが、住民参加の過程を取り入れると、時間もかかる、いろんな反対意見が出て議論が決裂するかもしれない、そういうイメージがあって、なかなか踏み込めないのかと思いますが。

小野寺 そういうところが多いでしょうね。

日向市駅前（⑤⑥参照）のときは中心市街地が衰退して、町の人たちが集まるような町の顔というものがどこにも無くなってしまい、商店はシャッターが降りて、というところに歯止めをかけなければという状況でした。駅を高架で造り直して、駅前広場、といってもいわゆる交通広場ではなくて、オープンな人間の広場を作る区画整理に着手しました。

整備が完了する直前あたりに、どう使うかという議論を行政と地域の人達と一緒に始めました。そうすると、イベントを毎週やりますとおっしゃるので、話半分に聞いていたら、完成後本当に毎週やっているんです。

最初のうちは行政主導というか、日向市が声掛けを始めたのですが、先程のグランドプラザの話と似ていて、使い始めると使い方が分かってくる。今度はうちで使いたい、と各方面から出てくる。そのうちに仕掛ける量が減ってくる、という感じになってですね、もちろんそれを受け止めるような形に作ってあるのですが、まさにそういう使い方をしてほしいという日向市の思いと、使い方とがうまくかみ合いました。

出口 駅前広場も本来、交通広場ですから、交通広場として備えていなければならない機能があります。道路も交通機能を担う空間ですから、その機能はきちんと成立させなければいけません。その上で新たに人が集まる機能を付加していく場合、コミュニケーションを促進する仕掛けや、にぎわいを創り出していくデザインが入る余地は、初期のプランニングの段階から意識しておく必要がありますよね。

小野寺 そうですね。

出口 小野寺さんのノウハウを少しお聞きしたいと思っているのですけど。公共空間には、交通など複合的な機能の要求がありますよね。それをどのように解きながら、にぎわいを創り出していくのですか。

小野寺 私が駅前広場を最初にやったのは北九州市の門司港（⑦⑧参照）です。このときは市の経済局の担当者が、駅の横手にJRの土地を買ってロータリー機能を駅正面から横に移し、駅正面は人間の広場にするっていう構想をすでに持っていました。交通広場と駅前広場を別に設けるプランは北九州市の発案だったんです。

日向市駅前の場合でも市が区画整理事業をやって、換地しながら道路や公共施設の場所を決めていくんですが、そのときに少しずつ交通ロータリーの横に日向市の用地が集まるように調整をしました。

ですからデザインに入る前に交通広場の横に緑地広場が都市計画決定されていて、最終的に一体の広場として整備できるようになるわけです。土地を初めに確保してあったところが上手なやり方だなあ、と思いました。

出口 まず土地利用を決定する段階、或いは換地する段階で敷地にある程度余裕をもっておいて、そこに住民参加のプロセスを経てデザインを仕掛けていく。

小野寺 門司港の場合は住民参加という意識が起きる前の事業で、対話のない一方通行でした。今は違って、踏み切る前にきちんと見せて意見を聞いて直すべきところは直して、でさらにデザインを検討するというプロセスでやります。

小野寺 氏

出口 やはり時間がかかるものですか。

小野寺 必ずしもそうではありません。出雲大社の神門通りの場合は、オープンを平成25年の大遷宮と同じタイミングに合わせる、とお尻が決まっていました。それまでに住民合意を経てデザイン設計して工事をやってオープンという、一歩も戻れない状況でした。プロポーザルをやる時間すら無かったから、島根県の担当者がうちの事務所に来て、こういう仕事だがやる気ありますか、と話が来たのが正直なところです。なので、街路幅員は何も変わっていません。その中で、デザインで人の動きをコントロールして、それまで車が主体だったのを、ちょっと車に遠慮してもらうようにデザイン的に工夫しました。

出口 空間配分を変えたということですか。

小野寺 そうです。まず7mの車道を、白線を狭めて5mにすることによってセンターラインを無くし、歩行者空間を広げて、松並木と建物の間しか歩けなかったところを両側歩けるようにしました。さらにちょっとデザインでトリックを使っています（②参照）。

歩道の舗装がちょっと車道の側に滲み出すようにしているんですね。そうしますと歩行者は車道のほうに出てもいいというメッセージを受けるので、歩行者空間が感覚的に広がります。車のほうは逆に歩行者が出てくるかもしれないと感じるので、遠慮して真ん中に寄らざるを得ない。全く幅員は変っていないのですが、動きが変りました。動きが変ると人の流れも変わります。整備前と今では人の通行量が30倍になりました。いや元々が少なすぎたので、その結果は自慢にならないだろう、と半分冗談で言われますが。

出口 空間配分をちょっと変えて、後は道路空間のデザインを心理学的に工夫することで、人のアクティビティや流れを変えた。それも公共空間デザインのひとつのあり方ですね。

ここで生きていくという地域の力を結集させる

出口 富山、日向、出雲といった地方都市の話を伺ってきましたが、地方都市を元気にしていく上で鍵となるのは魅力的な公共空間だと思っています。けれども、ただ同じような公共空間を作っていくと、70年代の駅前開発のときに言われた話ですけれども、金太郎飴みたいな町ばかりになってしまい、地方それぞれの地域らしさを引き出す必要があるのではないかと。「らしさ」というと漠然とした言葉なので、実際にそれをどうデザインやマネジメントに活かしていくのか、案外難しいかと思うのですが、その辺りはいかがですか。

山下 私はいろんな地域に関わらせていただいて、その地域の今ある強みというか、素晴らしさというか、良さを伸ばすしかないと思っています。自分が実感した地域それぞれの良さを大事にする。そして、より実感するために私はなるべく関わる地域で暮らすようにしています。

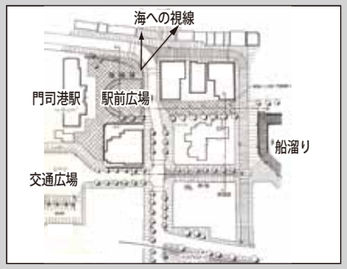
例えば福岡県の久留米市に赴任した際に出会った30代の方たちは、いわゆる若旦那気質を持つ地域全体のことも考える感性の高い方たちでした。

そして、彼らはすごく行動力もあるし豊かな感性もあるのを感じたので、2ヶ月に1回のペースで県外からまちづくりの実践者を迎え、皆で勉強会を始めました。そのときに心がけたのは集客目的のために不特定多数の聴講者を集めるのではなく、この勉強会を始めるにあたり彼ら自身が考えた活動のキャッチコピーである「この街でみんなで食っていくんです！」にふさわしく、一緒にメシを食っていきたい仲間に声を掛け合いました。まさに自治の精神が、彼らの感性と言葉から生まれました。そういうところが今すごくうまく回っていて行動力がすごいので好循環スパイラルが始まっているように感じています。例えば移住についてのプロジェクトを彼ら自身が感じ、考え、行動するのを市役所が応援してくださるとか、コミュニティのデザインを仕掛けていく先導者のようなチームを協働推進課と作りあげるとか、いろいろなプロジェクトに彼らがそれぞれの得意分野を活かして関わり始めています。

スタートアップの際に大事にした、15名程度のコアメンバー各々が、一緒にメシを食っていきたい仲間に3人ずつ声をかけて、各々が一回につき2500円程度払う参加費だけで勉強会を成立させていて、2ヶ月に一回のペースで集まって、それを20回以上続けているのですが、一緒にメシを食っていきたいという仲間が県内外からどんどん増えています。

出口 久留米のど真ん中にある商店街の再開発事業（久留米シティプラザ／⑨・22・23ページ参照）に広場ニストとして関わった結果、町全体にその活動が波及してきている、ということですか。

山下 広場ニストとしての仕事というより、キャスティングなんだと思いました。私のような余所



門司港駅前基本設計空間構成図

⑧門司港駅前広場：交通広場（北九州市）

⑦門司港駅前広場（北九州市）

日向市駅前全体平面図

⑥日向市駅前広場：交通広場（日向市）

⑤日向市駅前広場：「ひむかの杜」（日向市）

者が、これあなたお願い、って頼むと、何となく会議の場でキャスティングができて、誰も文句を言わないですね。地域の人同士には色々なしがらみがあるので、自分達だけで決めようとすると、なんでアイツなんだ、という話になりやすいですけど、余所者が何となく皆といい関係になってからキャスティングをした方がうまくいくように思います。それが、しがらみのない余所者の役割というか、いろんな地域で一番やっていることは、キャスティングかもしれません。

出口　それ、大事ですね。広場ニストの役割のひとつはキャスティングをきちんとやるということですね。

山下　はい。これは、もう一つ肩書きとして書いている「ひと・ネットワーククリエイター」の方かもしれません。

出口　広場ニストの延長上にあるわけですか、それは。そのやり方ですと、自ずとその「地域らしさ」が出てきますね。

山下　その人らしさを含め、その地域がありありと、いろいろと出てきます。

出口　その地域で育った人の個性の組み合わせが「地域らしさ」だということでしょうか

山下　はい、そんな気がしますね、風土の上にその人の営みがあると感じています。

小野寺　山下さんのキャスティングの前提となる価値観にすごく共鳴しますね。不特定多数の人をターゲットにするのではなくて、自分達がいかに暮らすかということ、自分達の町をどうするんだというところに焦点をあてている、というところが素晴らしい。それがないとキャスティングも歪んでくると思います。

私がデザインするときにも、そこが重要だと思っています。

例えば先ほどの道後温泉がある松山も観光都市、姫路駅前広場（⑩⑪参照）も姫路城という世界遺産的な観光資産がある観光都市ですよね。でも観光客のために、こうすれば観光客が来るだろうというデザインをすると、やはりうまくいかないですね。デザインのクオリティが上がっていかなくて。その地域の人達が、地域のものとしてプライドをもって、ここで商売をするんだ、ここで生きていくんだぞっていうような手応えが感じられる空間に仕立て上げないと。たぶん、使う人の気持ちのところまで届かないというのかな。

地場産業を活かし地域が誇る公共空間をつくる

出口　冒頭、小野寺さんは地域の人達と地域の素材を使うということをおっしゃっていましたが、もう少し具体的にお聞かせください。

小野寺　日向の場合は杉でした。あそこは宮崎県、いや、県というより地域一帯が一大供給地だったのです。だから今でも杉にプライドを持っている。内藤廣さんが、駅舎も杉でやってくれと言われて、杉は強度的に弱いので、ああいう大空間には向かないという理由で最初はやはり抵抗したのですが、地域のプライドを大事にしたいと考え直されて、杉で集成材を作ってですね、今の駅舎になっています（⑫参照）。

杉以外でも、材料をいかに使うかが重要です。日向の場合は駅前広場を皆が使えるようにプラザ的に利用したい、いろんな交流が生まれる場にして、町を立て直すんだと。でも南国の広場だから夏は暑い。雨もやたらと降る。日向の人はどういうところで活動をやっているのか調べてみたら、芝生広場だったんですよ。夏でも芝生の上はそれほど暑くならず、座れるし、日向では催し事に地鶏の炭焼きをやるので油が落ちるのですが、舗装だとデロデロになってしまうけど、芝生だと多少落ちても大丈夫だし、仮に破れてもすぐにメンテナンスができる。草むしりはしなければいけませんけど、それさえすれば芝生はスーパーな舗装素材ですよ。それを使いつつ、日向のそばに西都原（さいとばる）という宮崎の原風景みたいな古墳があるのですが、そのランドスケープの曲線や、その辺の風景を少し投影して。説明は特にしないけど、何かそういうふうにすると響くかな、というところを意識してデザインしました。

出口　それで芝生広場になった（⑤参照）。舗装材もいろいろ試されている？

小野寺　そうです。舗装材は基本的にずっと使い続けるものなので、時間が経って劣化するような材料は使いたくないです。ただ予算に限界があるのでレンガを使うことが多いです。

そのレンガ（⑥参照）ですが、日向の人達にとって最大のイベントといえるのが「日向ひょうとこ夏祭り」です。ユニークで滑稽なお祭りですが、ふんどしにお面を付けて踊ってですね、沿道の人を一番笑わせた人が勝ちという、一歩間違えると下品極まりなくなるような踊りでも、ベースとなる路面をきちんと品のいい材料で仕上げていくと、場が荒れないわけです。その辺も考慮して材料を決めることもあります。

出口　なるほど。それも計算して、というか想定して、その上で展開するわけですね。

小野寺　そうです。

山下　富山のグランドプラザのカジュアルワイン会も２０００円くらいする高級な薄いグラスを使うことにこだわっています。今のお話を聞いて、ベースに品があると、つまりワイングラスに品があると、皆さん品良く飲むんです。オシャレ感がとても大事です。

出口　紙コップやプラスチックでは駄目ですね。

山下　そうなんです。ポットラック・パーティーで、手料理を持ってこられるご婦人もいらっしゃるんですけど、皆さん品良くされるんですよ。今ひょっとこ祭りのお話を聞いて、品の良さをキープするために、空間の質がすごい重要だなあと改めて思いました。

出口　確かにひとつのノウハウですよね。

小野寺　それこそ、できるだけ地域の人達と、特に職人さん達と一緒に作るという形にしないと。

宮崎の日南市で、屋根付き橋（⑬参照）を掛けようという話があったときに、元々そこに掛かっていた橋が何回も流されたので新しい橋を掛けてください、というのが町の人の悲願でした。杉で屋根を掛けましょう、日南市は暑いから、屋根を掛けると涼しいし、水の上だから風が抜けるし、気持ちいいじゃない、というのが地域のご婦人から出てきたアイデアです。すごく腑に落ちて。

地域に屋根付き橋の伝統はないのですが、非常に合理的だし、地域性の延長上にあると思ったので、それをやろうと決めたのです。しかも普通に工事入札で地域の工務店がやるのではなく、最初の段階から、どういう木組みでやるのかを職人さんといっしょにデザインチームを作って、宮崎県と、地元の日南市、森林組合、大工さん、公共の杉を管理する宮崎県木材利用技術センターの副所長さんにも来てもらって、議論をして、皆で試作品を作りながらデザインしました。

山下 氏

山下　試作品を作るのは普通ですか？小野寺さん達が富山駅の工事のときのフロアシャンデリアの実験を、グランドプラザでしたことが印象的だったのですが。

小野寺　私はよくやります。富山駅の場合、フロアシャンデリアをどこで実験するかというと、グランドプラザしかないだろうと。あそこでやると必ず取材のカメラが来ると思って。

出口　メディアを意識して。作るプロセスも見せるってことですか。

小野寺　特に富山市は、ガラス工芸を伝統文化にして育てようということでガラス工房も作ったし、最近ガラスミュージアム（富山市ガラス美術館）もできました。そこで、国土交通省から副市長で赴任されてきた神田昌幸さんが、駅をガラスで演出したい、シャンデリアにしたいとおっしゃって。

ですが躯体ができあがった駅舎にあんな重いものを吊り下げられないです。駅舎というのは、基本的に躯体を鉄道・運輸機構とJRが持っていて、市が、杉張ります、アルミで飾りますといっても、躯体に直に取り付けができない。みんな浮かせているんです。

出口　別物？

小野寺　別物です。だからその躯体から重いシャンデリアを吊り下げるなんて論外なのです。そこで考えたのが、床にガラスを埋め込んで、上からライティングして、床でシャンデリア、つまり吊らないシャンデリアを作ればいい、という逆転の発想。

それを富山のガラス工房の方々と技師さん、デザイナーさんといっしょになってやったのですが、私も初めてなので、試作品を作らなければいけない。やるんだったら情報公開しよう。これはいけるという見通しが見えたところでプレスを呼ぼうと考えました。プレスの前で失敗するわけにはいかないので実は事前実験をしましたけど。

山下　富山駅を訪れるたびに、フロアシャンデリア（⑭参照）の周りを、はしゃいだ子どもたちが走っていて、いつも感激しています。

出口　そこから直に利益は生み出さないが、その空間が存在することによって地域の付加価値が高まるという、公共空間のひとつの意義ですね。

まち全体と調和し共鳴し合う広場・公共空間のあり方

出口　小野寺さんの著作『広場のデザイン「にぎわい」の都市設計５原則』の中に５原則とありますが。その辺りのエッセンスに触れていただきたいのですが。

小野寺　はい、簡単にいうと、ヨーロッパの広場の形をそのまま移植しても日本人には使いにくいと思っているのです。使い方の伝統文化というか、空間文化が違うので。建物に囲まれたオープンスペースというもの自体も、日本の町並みだとなかなか生み出しにくい形になっていると思います。

ヨーロッパのプラザに相当するものを日本に置き換えた場合、神社の境内かというと、そうでもなくて。境内から伸びていく参道にお店が並んで人でにぎわっている、道空間がひとつのプロトタイプだと考えています。しかもただの道ではなく、私は「主景」と言ってますけど、主景に向かってひとつのプロセスが空間化しているところが、たぶん一番分かりやすい。つまり寺社の本殿や金堂などを主景に見立てたとき、そこに向かう参道型なのですよ。

道後温泉の周りなどでも実は道後温泉本館という主景が見えて、周りをぐるぐる回れるような参道的なデザインにしているのです。回りたくなるようにしているのですね。つまり、ぽーんっと広い空間をわざわざ作らなくても、動きを与えることでにぎわいは出てくる、という感覚が私にはあるので。

そこで重要なのは、その主景たる何か。それは別に建物でなくても、山でもいいし海でもいいのです。

今震災復興の女川町で、駅前商業地の整備をやっていますけど、女川の場合は海なんです。

⑪ 姫路駅前広場：サンクンガーデン「キャッスルガーデン」（姫路市）

⑩ 姫路駅前広場：眺望デッキ「キャッスルビュー」（姫路市）

⑨久留米シティプラザ　六角堂広場（久留米市）

⑭富山駅構内のフロアシャンデリア（富山市）

⑬屋根付き橋「夢見橋」（日南市）

⑫杉材を使用した日向市駅舎（日向市）

海を見て暮らすというのがテーマで、海を見ながら酒を飲む、海を見ながら子供達が遊ぶ、そんなことが空間体験として自動的にできて、なおかつそれが今日のテーマの公共空間である。民間の建物に挟まれた中にまちの主軸となるプロムナードがあるのですが、その境界部分をいかに消して、建物とつないで、つまり公共施設と一体になった形に仕立て上げる。さらには、それが主軸になって「海を見ながら暮らすまち」のひとつの背骨ができれば、そこから派生するように横道もつくってですね、どんどん周りににぎわいが伝播するような仕掛けができるわけです。そんな仕掛けというか、イメージでデザインを展開しています。（⑮⑯参照）

出口　構造を創っていくということですか。

小野寺　そうです。空間の構造骨格を創っていくわけです。

出口　単に点的な施設、点とか線とかでなくて都市の骨格を創っていくという意識ですね。

小野寺　そうですね。門司港のときもそうだったのですが、町中に海に向いている感覚を創っていくことを「船溜り」エリア全体に仕掛けています。最初は門司港駅を降りても海が見えなかったのですよ。建物が2棟無くなったら駅を降りてすぐに海が見える状態になったのですが、エントランス性の高いターミナル駅なのですから、そこはやはり海を見せましょう、ということで提案しました。建物がなくなるまで10年かかりましたけど。

出口　そういう開発や再開発のプロジェクトを積み重ねて骨格を創っていく、という。

小野寺　そうですね。

出口　マスタープランや、明確なオーソライズはないかもしれないですけど、骨格づくりが都市デザイナーの役割ということですかね。

山下　マスタープランなのか分からないですが、地域の主景を探る大事な機会をきちんと作れたらいいと思います。

小野寺　マスタープランだとスタートのときは難しいでしょうね。

出口　社会経済情勢が変わると、プロジェクトの計画内容も変えざるを得ないので、10年後に確実にこうなるというマスタープランに基づいて開発を進めていくことには限界があると思います。小野寺さんのような都市デザイナーが介在して、その都度、起こってくる再開発事業をうまく誘導しながら地域の骨格を創り上げていくという、再開発事業と都市構造を形成していく都市デザインの間のつなぎ役が必要なのだと思います。

まちづくりプランにバッファーをもたせる

小野寺　ブリコラージュという言い方を最近一般にされているようですが、マスタープランとは違い、パッチワークのような意味ですが、例えば今パリにブリコラージュでまちづくりをされている事例があります。ベルシー地区（パリの東側セーヌ川沿いの再開発エリア）で、ワイン倉庫が並んでいたところをリノベーションしてレストランにしたり、ベルシー公園をテコ入れして、かつセーヌ川と繋いで、さらにその延長でシモーヌ・ド・ボーヴォワール橋をつくって対岸の図書館までつなぐとかですね。ここでは、お互いに動線を作っていって、マスタープランというよりは、この土地が手に入ったぞ、いけそうだぞ、というところの発想から周辺開発をリンクさせていく。

大まかなマスタープランや方向性はあるかもしれませんが、明確な処方箋のようなものはないわけです。

出口　マスタープランがあっても、必ずしも予定調和的にはいきませんし。

小野寺　むしろだからこそ、面白くなる可能性があると思うのですよ。

出口　逆に、ということですね。都市デザイナーが介在していくと、結果調和的に、結果として再開発事業が活きていくと思います。単体の開発で終わらせないで。

小野寺　ここ柏の葉の調整池（⑰参照）は元々調整池でしかないけれども、池の周りを緑にして遊歩道の一部にしたり、或いはひとつの拠点にして使うことによって、どんどんと周りに展開していく、その辺りがまさにブリコラージュです。

出口　調整池の利活用については当初の区画整理事業の計画になかったものですが、開発が進んでいく中で、そういう発想が生まれ、人が回遊し、休憩する空間を兼備した調整池となりました。

小野寺　センスだと思うのです。これをするのは絶対に必要なのだと。次の展開の布石に間違いなく「なる」という感覚ですよね。それがおそらくこれからの公共事業で地域の人達の思いを受け止めて空間を作っていくときの、ひとつのベースとなる取組み姿勢ではないかと思うのです。

建物の竣工ではなく利活用をゴールにする事業計画

出口　デザインとマネジメントとの関係についての話をしたいと思います。都市デザイナーとして主に空間を創ることを専門にされている小野寺さんと、空間を利活用するマネジメントの専門家の山下さんと、うまくお二人の専門が組み合わさるといいなあと思うのですが。

山下　夢ですね。

小野寺　面白いですよね。

出口　私もどちらかというと創る側ですので、完成するとひと仕事終わったと感じますが、魅力的な公共空間に仕立て上げていくためには、デザインとマネジメントが連携していかなければいけないですよね。

山下　マネジメントの予算を確保してください。いざ運営が始まると10万円、20万円を捻出するのが大変です。公共空間に限らないですが、建物の竣工が完成ではなく、使う人が育ったというところをゴールに予算組みをしていただければ。開業3年くらいまでいいと思いますが。

出口　結局、事業費も、整備するお金とマネジメントするお金との間が財政的には切れていますからね。

山下　完璧に切れています。

出口　人も、プロセスも、お金も切れていますね。整備には補助金も含めた多くの事業費があるので、その一部でもストックしておけないかと。

山下　一割もいらない、5%でもいいかもしれません。現場はできた後、あっこんな感じなんだとか、こんなふうに人は動くんだ、もうちょっとこれがあったらいい、など、でき上がった後で思うことがたくさんあります。

施設を作っていく上で利用者の動き方を想定されているとは思いますが、想定された動きだけでなく、想定されなかった動きにも価値があると思うのです。空間が、使う人たちのアイデアや動きを引き出す、想定されなかった動きを引き出す、さっきのフロアシャンデリアの周りで遊ぶ子供など、想定外のところで。そうしたことを見守って、ちょっと後押しできるような。

出口　そういう余地を残しておく?

山下　そう。開業3年くらいまで予算が確保されているとうれしいです。

小野寺　だからメニューは作っておきますが、完全に工事を終わらせないで、ベースを作っておいて、動きを見てから設計をちょっとだけ変えて仕上げる…なんて、本気でやろうと思ったらできそうですよね。

山下　そうしたい。夢のようですね。

出口　100%終わらせずに、後で様子を見ながら仕上げていく余地を残しておくと。その余地がまた利活用やマネジメントにつながっていきます。

小野寺　日向市のまちかど広場（⑱参照）で実際にそれをやったことがあります。駅前広場の延長上に小さな公園を作るスペースがあったのですが、日向市が設計をしないで留保していたのです。何故かと言うと、区画整理で両側の地権者が建物をほぼ同時に建てるであろうという読みで。建物の設計が出た段階でまちかど広場の設計を出す。当然地権者にワークショップに出てきてもらって。

そうすると、広場の隣の時計屋さんは、間口がこっちだから道路が妻側になる、自分達の生活動線を人にジロジロ見られたくない、だからスクリーンで目隠ししたい。L型の敷地のもう1軒の宝石屋さんは広場に面する間口全体に店を開くと。公園を作ってくれるのか、だったらちょっとセットバックするよ。レンガを敷くのか、じゃあ同じレンガを買ってウチの敷地にも敷けばいいのか?とかね。最後は施工段階で色々と調整をして、結局宝石屋さんはレンガの材料費だけで、施工費はほとんどなしでできました。

広場の設計は、隣地の建物の設計を待ってからワークショップをやって、どんなデザインがいいですか、という調整をやってできたということです。

地域の人が地域の発想で公共空間を育てていく

出口　デザインする段階で住民ワークショップなどを仕掛けて、その利活用やマネジメントを住民に委ねていく手法について、どう考えますか?

小野寺　震災復興でやっている女川町では、テナント型商店は、土地は女川町なのですが、地元の若手有志がまちづくり会社を作り、そこが主催で建物のプロポーザルをやって建築家を決め、自分達がテナントを選んで、調整して、花屋さんこっち、工房はそこ、飲み屋街はここ、と建築家と一緒にマネジメントして、建物プランを作っていきました。

私が担当したシンボル空間のプロムナード（⑯参照）はこの建物に挟まれているんですけど、テナント型商店街といっしょにプロムナードをいかに使ってもらえるか考えて、ウチのデザインを変えようということで、彼らと調整して、並木をちょっと取ったり、舗装を一体化しています。

建築の方も、中庭をわざとずらすように、さらに通り抜け通路も創ってくれて。そうするとにぎわいや動きが出てきました。テナント型商店街の背後は自立再建のお店ですが、そちらに抜けていけるようにわざわざ設計して造ってるんですね。そうすることで、皆でここ（にぎわい拠点エリア）に集まって商売をするのだという雰囲気が生まれます。しかも主軸の通りは女川駅から真正面に海が見えるので（⑮参照）、沿道は海を見ながら商売するという形でやろう、ということになりました。

さらに駐車場は、女川町が分散配置して作ったので、自立再建の人達は自分達の敷地にお客さんの駐車場を作る必要がなくなり、全部を建物で使える。駐車場の利用料はタダです。お客さんは車を適当なところで降りたら、歩いて楽しむような動きに勝手になるんですよね。

つまりは震災復興がきっかけになって、地元の若手が自分達が町を作るのだという、町の入れ替わりのタイミングになった。そこにハードが乗っかって、沿道性というソフトが育つ、そういうことだと思います。

出口　震災を契機にして新しい住民ベースのマネジメントということですね。

小野寺　さきほど山下さんが言われたように、まず自分達が好きな町、自分達が商売したい町という気持ちを重視してつくるんです。

山下　広場というのは、場があるだけで空っぽじゃないですか。その場に何が面しているのかも、大事だと思うんですよね。家賃を払ってくれるからといって、IT企業とクリーニング屋さんと郵便局が面して、広場には何も滲まない、そういう広場が実際にあります。

自分達が暮らし続ける町として、何がここにあったらいいか、という、まずは理想形を考えて

女川駅前シンボル空間平面図

⑯女川駅前：プロムナード「レンガみち」（女川町）

⑮女川駅前：テナント型商店街「シーパルピア」（女川町）

⑱まちかど広場「上町まちなか公園」（日向市）

⑰ライトアップされた調整池（柏市）

いくと思いますが、実際、広場を上手く活用する業種には、むしろ家賃を安くしますよ、ぐらいしないと地域の活性化に、広場がお役に立てないと思います。広場は町の心臓として人の流れという血液を送り出す機能を担えればいいと思っています。

そうするためには、業種もそうですし、開口部、面しているところの在り方を大事にしていただきたいし、使う人達の動きをもっとイメージしてもらえたらありがたいなあと思います。

出口　広場は誰にでも使いやすく、不特定多数の人が使うところだと思われがちですが、実際にはそうでもない。使う人を想定して、その人達を巻き込んで創り上げていくと、自ずと魅力的な空間になって、人が集まってくれるという、そういう流れで創っていくものですね。

にぎわいを生み出す血の通った公民連携とは

出口　では最後に、今後の抱負といいますか、今後どのような公共空間を創ることを心掛けていきたいかということを、お聞かせいただけますでしょうか。

山下　地方都市は車社会で、車で移動する人がほとんどですが、車を降りて歩ける、歩いていい感じだねというエリアがあることが、これからの地域にとって大切だと思うのです。何でもない広場があったり、木洩れ陽を味わえるベンチがあったり。これからの地域の幸福度は、そのような空間の数とその場所を楽しむ人の数なのではないかと感じています。それは人口のサイズや規模ではなく、そういった公共空間の豊かさというのは、数と質と、そこで豊かな営みを創出できる人の数がどれだけいるか、ということだと思っています。

出口　そのために公共空間はどうあるべきか、或いはそのために都市開発はどうあるべきか、歩くことから発想するということですね。

小野寺さんはいかがでしょうか。今後の、ご自身のこれから目指す方向性など。

小野寺　そうですね、地方でやる仕事が多いと先程話しましたけど、今のままじゃいけない、なんとかしたいという強い思いを持っている人といかに出会い、その人をサポートできるところまでもっていくには、どうしたらいいのか、今、つらつら考えていますね。

というのはこの間、南雲勝志さんと話をしていて、プロポーザルって厭だよねって彼は言うわけです。プロポーザルというのは、ある場所で計画設計やる気ありますか?と公募があり、やります、やりますと私みたいなのが何人か応募して、じゃあどうぞと選ばれるわけです。

しかし、私や南雲さんが受けてきた仕事の多くは、プロポーザルではなく、ちょっと困っているんだけど来てくれない?と、まず依頼者と我々との関係がフラットに始まって、最初から一緒に創って行こうという、つまり、甲乙が向かい合っているのではなく、甲乙が目標に向かって同じ方向を向いてプロジェクトが動くものでした。そうすると、推進力がまったく違うように感じます。まちづくりの進め方というところに何かそういう、モチベーションをもって、人がエモーショナルに動いて行くようなプロセスが何か作れないか、入口をサポートできるような仕掛けが何かないかなと悩んでいるというところです。

山下　すごい共感します。私もおかげさまで指名してくださる行政の方に出会って、仕事が続いている状態ですが、先生か、業者か、どちらかの関係性でしか測ってくださらない行政の方もまだまだ多く、フラットなパートナーとかチームにならないとできないことも多いと思うのですが。

出口　公共空間のデザインや、まちづくりは、貨幣換算できない価値を生み出すものですが、プロポーザル方式ですと、何かビジネスライクに見られます。事業を組み立てていく上で、最初の入り方やパートナーの組み方については事業主に是非工夫してほしいところです。事業の発注者は受注者を選ばなくてはならないですが、自分の眼で自信をもってパートナーを選び、デザインや広場ニストを育てていかないと事業が単発で終わり、持続的なまちづくりにつながっていきません。

今回、公共空間にスポットを当ててきましたが、再開発事業は、長い目で見たときには、足元に作った公共空間やオープンスペースのほうに、むしろ市民の人達や地元の人達が愛着をもっていて、そうした空間の魅力が事業地区全体の付加価値を高めていくことにつながっていると言えます。

上物が主役で公共空間やオープンスペースは脇役という考え方を変えないと、そこをデザインしたりマネジメントする人達が育ってきませんし、うまくマネジメントしていくための予算も出てこない、ということですよね。そこにブレイクスルーを作っていかなければいけなくて、それが我々に求められている役割かと思います。という点を強調してこの鼎談を締めさせていただきます。ありがとうございました。

（2017年10月26日：UDCKラウンジにて）

●右から出口センター長と山下氏・小野寺氏

●UDCKがマネジメントする駅前広場

UDCK（Urban Design Center Kashiwa-no-ha）

柏の葉アーバンデザインセンターの活動

鼎談の会場となった「柏の葉アーバンデザインセンター（千葉県柏市）」は、2005年の「つくばエクスプレス開通」と「柏の葉キャンパス駅」開業を機に翌年11月に開設された。

柏の葉ではUDCKという公・民・学が連携する組織が長期に渡る都市開発に深く関わることにより、同地区の構想に基づく一貫性を保った都市形成を可能にしているとのことだ。

区画整理事業に係る様々な事業やまちづくり活動の拠点として、道路や公園など公共空間のデザインの調整役を担ってきた。

開設から12年経ち、つくるときの調整役に加え、できあがった空間の調整役、或いはマネジメントの役割が増え、まちの成熟とともに役割が変化してきているとのことだ。

※写真番号①②⑤⑥⑦⑧⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑱及び図面は小野寺氏提供。写真番号③④は山下氏提供。

事例ルポ

にぎわいの場をつくる

公共空間のデザインとマネジメント

近年、広場や公共空間の利活用に向けた取組みが各地で積極的に行われ、ひとが集まり交流する場に育つことによって周辺に活力をもたらす事例が多く見られる。
成果を上げた地区の具体的な手法について現地取材した。

2 事例ルポ

多治見駅北広場
虎渓用水広場
（岐阜県多治見市）
先人の偉業を受け継ぎ
駅前広場に再建して交流拠点に
P 16-17

1 事例ルポ

飯田市並木通り
りんご並木周辺
（長野県飯田市）
まちづくり会社が主体となった
中心市街地再生の取組み
P 14-15

5 事例ルポ

久留米シティプラザ六角堂広場
（福岡県久留米市）
集客力の高い公共施設による
中心市街地のにぎわい創出
P 22-23

4 事例ルポ

松山市
ロープウェー街大街道・銀天街花園町通り
（愛媛県松山市）
歩いて暮らせるまち
にぎわいを創る都市デザイン
P 20-21

3 事例ルポ

天理駅前広場
コフフン
（奈良県天理市）
子供たちを呼び込む
駅前広場の空間デザイン
P 18-19

飯田市並木通り
りんご並木周辺
（長野県飯田市）

まちづくり会社が主体となった中心市街地再生の取組み

飯田市は長野県最南部の伊那谷に位置し、天竜川の段丘面にできた旧城下町―通称「丘の上」を中心市街地として発展してきた。しかし昭和60年から平成7年頃にかけて「バイパス開通に伴う郊外型大型ショッピングセンターの進出」「高等学校および市立病院の郊外移転」「中心市街地の大型店西友の撤退」が相次ぎ、10年間に市街地人口が16％減少する事態となった。これに対して、市は平成2年、「中心市街地活性化計画」をまとめ、りんご並木再整備と再開発事業に取り組むこととした。

平成10年には「橋南第一地区」再開発事業の都市計画決定が行われ、同年、地元経済界と飯田市などの出資による㈱飯田まちづくりカンパニー（以下、まちづくり会社）が設立された。翌年にTMO（タウンマネージメント機関）として認定を受けている。以後まちづくり会社は市と連携し、自らデベロッパーとして再開発ビルの床取得・賃貸等を行なうほか、周辺地区の空店舗活用やイベント企画、市民活動支援などのソフト面の活動も実施し、市街地活性化に大きな役割を果たしている。

たのは平成2年。これを機に市と地元の各組織が一体となったワーキンググループが設立された。平成3年には「りんご並木まちづくりフォーラム」が結成され、りんご並木を主軸に据えた方向性が固まった。

りんご並木とは、幅員30mの並木通りの、南側300mほどをいう。市街地の中心に位置し、市の顔となってきた。市は手始めにりんご並木全体を公園のような歩車共存のコミュニティ道路とすることとし、片側2車線から1車線に変え、更に舗装も透水性の高いレンガ舗装とした。

同じ頃、江戸時代に建造された三連蔵（さんれんぐら）が市に寄贈されたため、りんご並木と三連蔵を連携させ、にぎわい創出の拠点とすることになった。飯田市建設部地域計画課課長の遠山氏は「りんご並木の改修は市がやるけれども、景観も含め、その後沿道がどうなっていくのかが重要でした。りんご並木沿道の開発がまちづくりそのものだという認識は、街の人々の間でずっと継承されており、まずは市がパイロット的に三連蔵の改修をやったということです。」と語る。㈱飯田まちづくりカンパニー代表取締役専務の三石氏も「当時りんご並木の周辺は空き店舗と空き事務所ばかりで、何もなかったのです。だから市街地再開発事業に先行して観光とコミュニティの中心拠点をつくろうと、三連蔵にカフェやレストランを入れました。コンセプトは『小バレ空間』。小さなハレの空間という意味です。」こうしてりんご並木沿道を主軸とした中心市街地再生の構想が固まり、事業が始動した。

りんご並木を生み出した65年前の都市計画

りんご並木誕生のきっかけは、遡ること昭和22年、わずか半日で町並みの8割を焼き尽くした大火だった。復興計画の要点としてつくられたのが防火帯の機能を持つ幅員30mの「並木通り」と幅員2mの避難路「裏界線（りかいせん）」である。

復興計画の策定当時、飯田東中学校の校長と生徒が「りんごの実る明るく美しいまちづくり」を願って市に働きかけ、りんご並木が実現した。手入れは現在も飯田東中学校の生徒が行っている。誕生から65年。りんごの木の枯死、実の盗難、露天による悪影響、駐車場への変更計画等、幾多の困難を乗り越え、守り継がれてきた。

市民の力を結集したまちづくり会社が果たす役割

まちづくり会社は中心市街地の再生に向け、自ら事業を行うのみならず、店舗のサポートやイベントの企画などソフト面の活動も実施し「まちづくりの総合支援会社」を標榜している。

まずデベロッパー事業としては再開発ビルの床取得、テナント賃貸、住宅販売のほか、周辺地区の空店舗活用や駐車場整備などを行なっている。自らリスクをとって事業を行なうことで地域の状況を把握し、りんご並木周辺地区全体に目を配りながら、更なる事業展開につなげている。「りんご並木横丁いこいこ」は再開発構想が休止している地区の空店舗群をリノベーションした飲食店街で、テナントも地元から集めている。

またソフト面では、音楽、映画、スポーツ等のイベントを行なう市民団体「IIDA WAVE」や、起業家育成事業等を行なう「NPO法人いいだ応援ネットイデア」など、多くの市民活動団体を支援している。平成20年にはりんご並木に関わる市民団体等と共に「りんご並木まちづくりネットワーク」を設立し、月1回、りんご並木を歩行者天国として「人形劇フェスタ」「丘のまちフェスティバル」などのイベントを開催している。

「20年近く前、地方の再開発は大手デベロッパーがやってきて、後は箱物が残るだけになりかねない、最初から地元でやろう、まちづくりのノウハウが地元に残るようにしたい、と市からうまく誘導されて立上げました。」とまちづくり会社設立のきっかけを語る三石氏。以来りんご並木周辺で再開発やリノベーションなど多様な手法により、レストランやカフェバー、フラワーショップ、ケーキ店等、「小バレ空間」の形成をプロデュースしてきた。今や市内で最も出店希望者が多い場所になったという。中心市街地再生に向けて、まさに市と二人三脚で活動を続けてきた成果が現れたといえるだろう。

●丘のまちフェスティバル「痛車」※

●りんご並木・西側から

●収穫祭（平成29年10月）※
りんご並木で収穫したりんごは福祉施設や養護施設などに贈られる。

●丘のまちフェスティバル（平成29年11月）※

●Music Wave（平成28年11月）※
まちなかで月に1回開催される屋外ライブ。

※イベントの写真はまちづくり会社提供

飯田市地域計画課
遠山広基氏（左）
㈱飯田まちづくりカンパニー
三石秀樹氏（右）

9 並木テラス
リノベーションによるりんご並木沿道商業施設の再生。

8 三連蔵

4 橋南第一地区市街地再開発事業
平成13年に竣工した最初の再開発ビル。回遊性を高めるため裏界線などの通り抜け通路を整備。2・3階に市のりんご庁舎が入っている。4階以上は住宅。

りんご並木

5 りんご並木横丁
いこいこ

6 MACHIKAN2002
まちづくり会社が空き店舗2軒を買い取り、リノベーション補助金を活用して建設したテナントビル。

7 川本喜八郎人形美術館
飯田には300年以上続く人形芝居の伝統芸能があり、人形劇のまち飯田の顔として平成19年開館。人形美術家「川本喜八郎」から寄贈された200体余の人形を展示している。
橋南第二地区市街地再開発事業で整備された。

りんご並木及び周辺地区の事業沿革

昭和28年	3月	飯田東中学校の生徒によるりんごの植樹
平成2年	3月	中心市街地活性化構想が市民より出される
平成5年	3月	りんご畑を広げ、歩車道を一体化する再整備案を作成
平成10年	8月	㈱飯田まちづくりカンパニー設立
平成11年	3月	りんご並木再整備工事竣工
	8月	㈱飯田まちづくりカンパニーがTMO認定
平成12年	9月	三連蔵オープン
平成13年	7月	飯田市橋南第一地区市街地再開発事業竣工
平成18年	6月	飯田市橋南第二地区市街地再開発事業竣工
平成20年～		「りんご並木リノベーション事業」開始
	7月	「りんご並木まちづくりネットワーク」設立
平成22年	4月	「エコハウス」オープン
平成26年	11月	「りんご並木横丁いこいこ」オープン

1 りんご並木の景観

3 裏界線
裏界線とは建物の裏側に設けられた幅員2mの避難路で、土地所有者から用地を供出してもらい、市の所有としている。現在55路線ある。

2 初代植樹木（樹齢65年）
りんご並木の初代植樹木は、明治時代に初めて日本に移入された「国光」「紅玉」の2本から挿し木されたもので、日本における西洋りんご発祥のひとつと言われている。写真は初代の「国光」。

多治見駅北広場
虎渓用水広場
（岐阜県多治見市）

先人の偉業を受け継ぎ駅前広場に再建して交流拠点に

多治見市は岐阜県南部に位置し、古くから美濃焼の里として名高く、窯元や中心市街地、市役所が多治見駅南側、土岐川南東部に広がっている。

名古屋までＪＲ中央線快速で35分程度という利便性から、名古屋のベッドタウンとして駅周辺が注目を集めている。

市は平成2年度、多治見駅周辺市街地整備基本計画案並びに事業計画案を作成。平成11年、駅北側の高度利用を図り宅地化を進める多治見駅北土地区画整理事業に着手した。南北の交通円滑化を目的として道路と駅舎を整備。橋上駅に建替えて、南口しかなかった駅に北口を設けるとともに駅北口前に多目的広場を整備する計画だった。このとき地元から由緒ある虎渓用水を活かし、先人の偉業を次代に伝える広場にしたい、と強い要望が寄せられ、平成22年、虎渓用水の復元と活用を検討する「水と緑の委員会」が発足。平成28年、虎渓用水広場が完成した。

現在は暗渠化された明治時代の遺産「虎渓用水」

虎渓用水とは、明治時代に農民が村の財産を売り払いながら難工事を経て竣工（明治35年）した農業用水で、水路の総延長が１６２０ｍにおよぶ（17ページ左下地図参照）。土岐川から取水し、虎渓山にトンネルを掘って農地に水利を巡らせ、大原川を経て再び土岐川に放水するが、近年の宅地化につれ、暗渠化されて上部が歩道等に変わっている。

多治見市都市計画部の守屋氏によれば多治見駅北土地区画整理事業にあたって「50代以上の人には小さい頃シジミをとった、などの思い出や愛着があり、市としても歴史遺産を活用したいということで、虎渓用水を活かした広場にすることになりました。」とのことだ。平成12年頃から駅前広場についての意見を市民から集めたが、子供が安全に遊べる芝生広場がいい、ユニバーサルデザインの時代に階段や水路を作るのはいかがなものか、等の意見も多くあったとのことだ。また土岐川からの水利権は国土交通省が管轄しているため、農業用水の許可を環境水利に切り替える作業にも時間を要したそうだが、でき上がった虎渓用水広場を見た市民は、こぞって喜んでくれたそうだ。

盆地と用水を模した水と緑が美しい広場が誕生

虎渓用水広場は、多治見盆地を模して凹地になった約45ｍ×約69ｍの親水広場だ。既存の虎渓用水から新たな導水管で水を引き込んでいるため、循環水ではなく常に土岐川の水が流れる。安全対策として広場に流れる水量を一定に保つ調節バルブも設置されている。

駅前から広場に降りる階段はそのままイベント時の観覧席になる。イベント広場だけでなく、市民が気軽に立ち寄れるテラスや水路脇の散策路が整備され、テラスで昼食の弁当を広げるＯＬや、幼児を連れた若いママ達が談笑する姿が見られた。

夜間は防犯を兼ねてライトアップされ、昼夜を問わず駅前に美しい水と緑の景観をもたらしている。

市民が留まる広場に育てるまちづくり会社の挑戦

虎渓用水広場の管理運営を委託されているのが第三セクターの多治見まちづくり㈱（以下、多治見ＴＭＯ）だ。平成13年、多治見市、商店街組合、商工会議所、東濃信用金庫ほか地元企業等が出資して設立された。中心市街地活性化に向け、商店街の空き店舗を活用したクラフトショップや地元陶芸作家の作品で食事ができるカフェの運営、市営駅北立体駐車場の指定管理等、各種の事業を展開している。駅南側の商店街の活性化を中心に活動してきた多治見ＴＭＯにとって、駅北側に誕生した広場の利活用は手探りだった。

❶虎渓用水広場全景 ※

❷水路

●ポニーふれあいイベント

●たじみえき キタビアガーデン ※
7月から9月の金・土の夜はビアガーデンでにぎわう。

※の写真は多治見まちづくり㈱提供

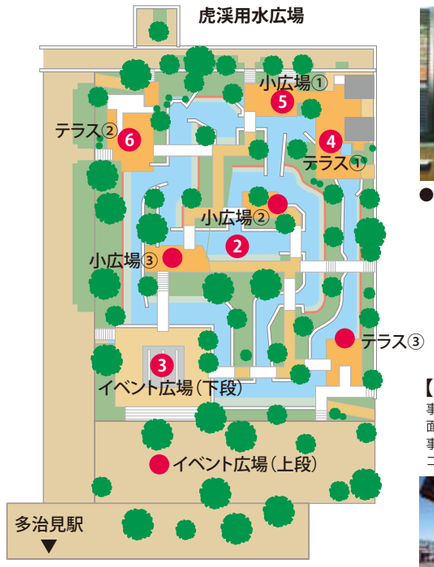
●土岐川

●うながっぱ
平成19年8月に記録した国内最高気温（当時）を機に誕生した多治見市のマスコットキャラクター。古くから伝わるかっぱ伝説と名産のうなぎから命名。

●多治見まちづくり㈱　岡部青洋氏

●多治見大道芸見本市（平成29年4月）※

●多治見よさこい（平成29年10月）※



●多治見市都市計画部
守屋努氏

●多治見駅北口一帯（整備前）
正面が旧駅舎、右奥が鉄道貨物ヤード
（多治見市提供）

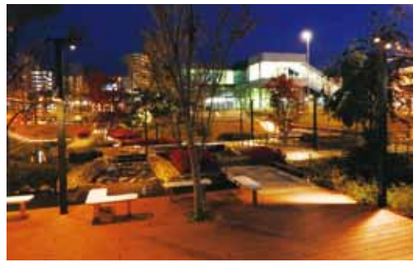
【事業概要】
事業名称／多治見駅北広場（愛称：虎渓用水広場）
面　　積／約3,105㎡
事業施行期間／平成27年7月～平成28年6月
コンセプト／いつでも魅力的で立ち寄りたくなる場所

❹テラス①

❸イベント広場の噴水 ※

❻テラス②

❺小広場①


●虎渓用水広場夜景
奥が橋上駅舎に生まれ変わった多治見駅。

❾精華町のポンプ

❽弁天池

❼トンネル入り口

虎渓用水広場の事業沿革

平成12年　　：多目的広場ワークショップ開始
平成13年　8月：多治見駅北地区の新たな風景づくり計画
　　12月：多治見まちづくり会社設立
平成21年11月：橋上駅舎、南北自由通路供用開始
平成22年　2月：多治見駅北地区における虎渓用水を活用した「水と緑の委員会」発足
平成28年　7月：虎渓用水広場完成（名称：多治見市多治見駅北広場）

天理駅前広場
コフフン
（奈良県天理市）

子供たちを呼び込む駅前広場の空間デザイン

全国的に子育てしやすいまちづくりが注目されている。子育てしやすいまちづくりとは何か。広い公園や十分な保育施設、資金面での補助などがあるだろう。

奈良県天理市は、天理駅前広場を再整備することで、子供たちを呼び込む賑わい空間を造り上げた。新しい駅前広場は、子供たちが遊ぶ公園であり、学生たちの学習スペースや溜まり場であり、地域文化を知り楽しむイベント会場でもある。

人口減少社会において、コンパクトシティ＋ネットワークに向けた取組みが進む中、まちと交通の結節点である駅前広場の賑わいとして「子供たちが集まる空間」を整備し、平成29年4月にオープンした天理駅前広場コフフンを紹介する。

駅前広場再整備の経緯

奈良県北部に位置する人口約7万人の天理市。電車や車で大阪や京都へ1時間程度の距離にあり、日本最古といわれる道「山の辺の道」や神社「石上（いそのかみ）神宮」、天理教の関連施設などがある。

天理市内の主要駅であり、1日あたり平均乗客数が約1万人の天理駅。JR万葉まほろば線と近鉄天理線が乗り入れている。駅前には広大なスペースがあり、約半分はバス乗場やタクシープールなど自動車空間として、もう半分は歩行者空間として整備され、地下には放置自転車対策の駐輪場（計2740台）が設置されている。

歩行者空間は約6000㎡と広く、従前は商店街に向かう歩道や軽微な街灯・ベンチ等が整備されていた。ところが、広大な歩行者空間はかえって寂れたイメージを与え、通勤通学時間帯を除いて閑散とし、親子で遊べるスペースや来訪者が気軽に過ごせる場所がなかった。そこで、駅前広場を活気あるものとし、人を呼び込める賑わいの拠点とすべく再整備が計画された。

課題抽出とプロポーザル要件の整理

駅前広場の再整備にあたり、平成26年4月に街づくり協議会が発足され、駅前広場の課題や地域の潜在力が洗い出された。挙げられた課題の一つが、親子で遊べる場所や気軽に過ごせるスペースが不足していること。公園はあるものの魅力的な遊具がなく、天理市の子供は他の自治体よりテレビの視聴時間が長いとの調査結果もあった。また、市内の学校には全国レベルのマーチングバンド部があり、さらに柔道のオリンピック金メダリストを輩出するなど、芸術文化やスポーツが活発にも拘わらず、これらが市民に認知されていないことなどが課題に挙げられた。

これらの課題を解決するため、新たな駅前広場には「子供たちが遊べる芝生広場や遊具」、「子育てママが安心して過ごせる授乳室やキッズスペース」及び「地域の文化や産業を発信するステージ」などの施設が必要とされ、デザインプロポーザルの要件が整理されていった。

子供たちを呼び込む空間デザイン

平成26年5月に駅前広場のデザインプロポーザルが実施され、市内に点在し日常生活に溶け込む「古墳」をモチーフとしつつ、子供たちが遊べる遊具や地域文化を発信するステージなどが組み込まれた提案が選定された。

広場名称のコフフンは、デザインのモチーフである「古墳」と「フフン～♪」と鼻歌を歌う様子を併せたもの。オープン後は、コフフンに行くことを表現する言葉として「コフリ（に行く）」という造語も生まれ、愛着ある名称として市民に浸透している。

駅前広場の賑わいづくり

オープン2年前の平成27年4月には、学生や若者などが加わった賑わいづくり作業部会が発足され、広場の賑わいづくりについて議論スタート。オープン半年前には広場の事業者も加わり、企画・構想を実行に移すべく賑わいづくり委員会となった。天理市が事務局となり、広場使用に関する諸手続きや各種イベントのコーディネートなどを行う体制を構築。オープニング期間のイベントとして、スポーツジム主催の足が速くなる子供向け教室、ヨガインストラクターによる親子向けヨガ、大学主催の音楽イベントや音楽団体による休日公演、コフフンショップ主催のマルシェ、奈良の地酒講座などがセットされた。

平成29年4月のオープン以降、土日祝日はほぼ毎日イベントが開催され、駅前が賑わうようになった。オープン当初3ヵ月間のイベントは事務局にてコーディネートされたものであったが、活動内容が認知されたことで、その後は市民主導でのイベント開催が続いている。平日も未就学児連れの親、幼稚園や小学校帰りの子供たち、帰宅途中の学生などに利用されるようになり、遊び場や学習スペース、親同士の交流の場などとして賑わっている。また、近くの商店街の空き店舗に新しい出店が決まるなど周囲への波及効果も出てきている。

子供たちが集まるプラットフォームの活用

駅前広場の再整備により、まちの玄関口であり、人々が行き交う駅前広場に子供たちや子育て世代が集まる空間が出来あがった。コフフンに行き、子供を遊ばせながら親同士の交流やカフェを楽しむことが、子育てママの新たな生活スタイルにもなってきている。

子供たちが集まる駅前広場というプラットフォームをどのように活用していくのか。例えば、保健センターで開催されている子育て世代向けの各種教室は限られた人にしか認知されていないが、子供たちが集まるコフフンを活用することで、認知や参加が広がるかもしれない。天理市では、このような駅前広場の利活用について広場運営を担当する部署のみならず、児童福祉を担当する部署などを含めた部署横断的な会議体を立ち上げ、検討を進めている。

アクセスに優れ、人々が行き来する公共空間である駅前広場に子供たちが楽しめる遊具を設け、イベントを通じて地域文化を知り、愛着が持てる環境を整える。そして、子育て世代が子供と一緒に駅前広場に行くことを人に自慢したくなるようなデザイン空間に仕立てる。天理駅前広場は、子育てしやすいまちづくりを公共空間のデザインに落とし込んだ一つの形である。

● 天理駅前広場コフフン全景（撮影：太田拓実）

CoFuFun
天理駅前広場コフフン

Fuwafuwa Cofun
ふわふわコフフン

● コフフンのロゴとピクトグラム

❶ すりばちコフフン
木の板を大きなすりばち状に張り巡らせた遊具。すりばちの壁をぐるぐる回って登る。

❷ ふわふわコフフン
屋上にあるドーム型の巨大トランポリン。眺めも良く、子供たちに大人気。

❸ 南団体待合所
高架下の屋内パブリックスペース。絵本や知育玩具で遊べ、机や椅子、無料のWi-Fiサービスも利用可。

❾ ステージコフフン
約250人収容可能な屋外ステージ。音楽・照明・映像機器を備え、コンサートやパフォーマンスに使用できる。

※施設写真①・③・④・⑤・⑨は天理市提供

● 天理市
総合政策課
吉本幸史氏

❹ テーブルコフフン（撮影：太田拓実）
見通しが良く、近くで子供を遊ばせながら読書・ランチなど、自由に過ごせる。

❺ 多目的広場の遊具
すべり台やブランコ、ボルダリングなどの子供向け遊具や大人向けの健康遊具を設置。

❽ ベビーコフフン
授乳室・オムツ替え室があり、絵本やおもちゃのあるキッズスペースも併設。

❼ コフフンショップ
天理を中心とした奈良県内でつくられた逸品の展示販売所。

❻ インフォ＆ラウンジコフフン
地元の食材を使用したカフェレストラン、観光案内所及びサイクルショップ。

建築概要

名　称：天理駅前広場コフフン
発注者・運営者：天理市
総合デザインディレクター：nendo
指定管理者：東洋テック TEAM TENRI
敷地面積（南広場）：7,702.435㎡
建築面積：1,130.3㎡
総 工 費：約10億円
構　　造：PCaPC造、一部鉄骨造
開 所 日：平成29年4月

松山市
**ロープウェー街
大街道・銀天街
花園町通り**
（愛媛県松山市）

歩いて暮らせるまち にぎわいを創る都市デザイン

松山市は人口51万人を有する四国最大の都市である。古くから城下町として栄え、中心部には行政や商業などの都市機能施設が集積している。松山城の周辺には路面電車が走り、空港・ターミナル駅などの交通拠点が中心部から約5㎞圏内に配置されるコンパクトな都市として発展してきた。日本最古の湯「道後温泉」などの観光コンテンツも豊富で、正岡子規・夏目漱石・司馬遼太郎に代表される文学の舞台としても人気がある。商業面では、平成20年に大街道商店街の大型商業施設が建物の耐震性の問題で閉館。同年、松山市の隣町に大型ショッピングセンターが開業し、中心市街地は厳しい状況に直面した。そうしたことからにぎわいを再生するべく、行政・まちづくり会社・アーバンデザインセンターなどがまちづくりに取り組んでいる。

街路整備で活性化したロープウェー街

大街道商店街の北に位置し、松山城に登るロープウェイ乗り場へ続くロープウェー街。平成11年に電線類地中化計画の合意区間になり、街路の再配分と道路景観整備の協議がスタートした。行政から地元に対して、車道を削減して歩道を拡幅する提案を行ったところ、商店主たちは「車で買い物に来る客が減少する」として反対し、2年間話は平行線だった。

その後も話し合いを続け、商業支援策の提示や社会実験を実施したところ、徐々に地元の理解が得られ、平成16年に商店街主体のファサード整備が完了、18年には行政による街路の再構築も完了した。その結果、歩行者数は約3.5倍、営業店舗数は約1.5倍増加したほか、地価が上昇するという効果も得られた。ロープウェー街では、現在も地元主体で歩行者天国などのイベントや日常の清掃活動が行われ、地域活性化に寄与している。

松山全体の活性化と市民の愛着醸成に取り組む「株式会社まちづくり松山」

松山の中心部には大街道と銀天街というアーケードがL字型に接続する商店街がある。平成17年、公共空間から収益をあげるモデルを検討していく中で、エリアマネジメントを独自に行う必要性を感じたこれらの商店街が、完全民間企業として設立したのが㈱まちづくり松山だ。中心市街地活性化法が改正されたことで、中活協議会の一員として松山市等の出資を受け、現在のまちづくり会社の形態となった。

同社の主要な取り組みとして、商店街内7カ所の「まちなか目安箱」の設置がある。その目安箱という形式で、まちづくり参画へのアクセスポイントを設けることにより、民主導のまちづくりを推進する試みを実施している。その他にも様々な調査を実施した結果、来街者が近隣に住む高齢者や学生に偏っていることが明らかになったため、「お城下スプリングフェスタ」のようなファミリー層向けの様々なイベントを開催している。また、大街道・銀天街のメインストリートに複数の大型ビジョンを設置し、CMやイベント告知等の情報を発信する収益事業も行っている。

大街道と銀天街の課題として、中間に位置する街区が伊予鉄道松山市駅や路面電車から離れているために集客力の点で劣るということがある。そのため、平成29年4月に区域の一角約1万㎡を再開発する準備組合が地元地権者らにより発足され、商店街に新たなにぎわいを創出する取り組みがスタートした。再開発区域（湊町三丁目C街区）には商業、公益、オフィス、共同住宅、広場、駐車場などの整備が検討されている。

まちづくりの推進と次代の担い手を育成する「松山アーバンデザインセンター」

松山市では、公民学連携のプラットフォームとして松山アーバンデザインセンター（以下、UDCM）が平成26年に設立された。大街道と銀天街近くの路地裏の空きビルを改修し、1階を誰でも使えるフリーテラス「もぶるテラス」に、2階をUDCMの事務所として整備した。さらに、道路向かいには小高い丘と土管が特徴的な「みんなのひろば」を整備し、まちなかに暮らしの風景を生み出した。

UDCMには景観や土木の専門家が3名常駐し、行政や民間と連携してプロジェクトに取り組んでいる。例えば「大街道商店街一番町口の景観整備」や「花園町通りの道路空間整備」など、市の重要施策に参画している。この他にも、学生や社会人を対象にまちづくりを実践的に学ぶ「アーバンデザインスクール」を開講するなど、まちづくりの担い手育成にも取り組んでいる。今後も地元・行政・民間を繋ぐまちのコーディネーターとしての活躍が期待される。

花園町通りを「歩いて暮らせる松山」のシンボルロードとして整備

松山市中心部の「花園町通り」で、にぎわい創出の新たな取り組みがスタートした。

平成29年9月、松山城のある城山公園とターミナル駅の松山市駅を結ぶ市内で最も幅の広い道路で、快適な歩行空間を整備する工事が完了した。この工事では、片側2車線の車道の1車線化や電線類の地中化、自転車道や駐輪場、ウッドデッキの設置等が行われた。さらに東側の商店街では、地元と行政の協力でアーケードを撤去。地元中心でファサード整備を行い、良好な景観が創出された。通り沿いにある俳人・正岡子規の生誕地跡周辺には、子規が俳句で詠んだ草花を植栽し、市の花であるツバキをモチーフにした「俳句ポスト」も設置された。

整備後すぐに、広くなった歩道を活用したマルシェイベントが地元主体で毎月開催され、家族連れなど多くの人が新しい花園町通りを楽しんでいる。

●俳句ポスト（提供：松山市）
花園町通り沿いの正岡子規生誕地跡周辺に俳句を投函する俳句ポストを設置。観光客などから多くの俳句が寄せられている。

❷ロープウェー街

● ロープウェー街（整備前）

▼

● ロープウェー街（整備後）
全長500m、幅12mの2車線道路を1車線に縮小し、歩行者優先の道路とした。同時にアーケード撤去と無電柱化を実施。煉瓦・石・鋳鉄などの質感のある素材を使用。

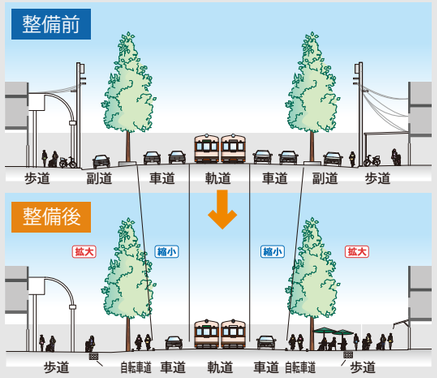
※写真・図版ともすべて松山市提供

❺花園町通り

● 花園町通り商店街（整備前）

▼

● 花園町通り商店街（整備後）



● 花園町通り
花園町通りは全長250m、幅40m。中央を路面電車が行き交う。片側2車線の車道を1車線化し、歩道幅を最大10mに拡幅。自転車道も設置。

※写真・図版ともすべて松山市提供

● お城下スプリングフェスタ
（平成29年3月　提供：㈱まちづくり松山）
大街道・銀天街で開催される大型イベント。

● まちなか目安箱
（提供：㈱まちづくり松山）
商店街利用者の声を拾ってサービスの改善に結びつける。

●㈱まちづくり松山にて
日野二郎氏
㈱まちづくり松山・会長

松山市ロープウェー街／大街道・銀天街／花園町通り整備の経緯

平成17年7月：㈱まちづくり松山設立
平成18年4月：ロープウェー街供用
平成20年1月：大街道商店街一番町口の大型商業施設撤退
4月：松山市の隣町で郊外型大型ショッピングセンター開業
平成26年2月：松山アーバンデザインセンター設立
11月：みんなのひろば・もぶるテラス開業
平成27年8月：大街道商店街一番町口ファサードのリニューアル
平成29年4月：松山湊町三丁目C街区市街地再開発準備組合設立
9月：花園町通り歩道拡幅工事の完了

❹ 松山銀天街西口
㈱まちづくり松山の主要事業として、銀天街商店街西口に283インチの大型ビジョンを設置し、映像による情報発信を行う。（提供：㈱まちづくり松山）

❸ 大街道商店街一番町口夜景
鉄と木目を合わせた透過性のあるデザインが印象的。隣接する再開発ビル（ホテル・結婚式場・商業施設等）も景観コンセプトは統一感を持たせた。

●松山アーバンデザインセンター「もぶるテラス」前にて
※"もぶる"とは伊予弁で"混ぜる"という意味。

左から 尾﨑信氏　松山アーバンデザインセンター　ディレクター
小野悠氏　同 ディレクター
光永早織氏　松山市役所 都市デザイン課主任
兵藤一馬氏　同　副主幹

❶ みんなのひろば（提供：松山市）

久留米シティプラザ
六角堂広場
（福岡県久留米市）

集客力の高い公共施設による中心市街地のにぎわい創出

福岡県南西部、筑後平野に広がる久留米市は、明治22年、日本で初めて市制が施行された市のひとつで、平成17年の大合併で人口30万の中核市となった。平成23年には九州新幹線の全線開通により、それまで以上に博多や九州南部との時間距離が縮まった。

久留米シティプラザが開業したのは平成28年。JR久留米駅と西鉄久留米駅の中間地点である六ツ門地区に位置し、西鉄久留米駅まで続く「久留米ほとめき通り商店街」に面している（23ページ左下地図参照）。ちなみに「ほとめき」とは筑後地方の言葉で「おもてなし」を意味している。

市が直面していた課題のひとつが、人口は増えているのに、中心市街地から中核店舗の撤退が相次いでいることだった。中心市街地の空洞化に歯止めをかけ、にぎわいを取り戻すため、市街地再開発事業を活用して新たな市のシンボルとなる文化交流施設を整備したのである。

あえて箱物を建設し集客機能を高めてまちの拠点に

久留米市の六ツ門地区は百貨店（久留米井筒屋）と商店街を中心として、久留米のみならず福岡県南の広域商圏をリードしてきた。しかし平成15年、郊外に大型ショッピングタウンが進出したことを境に集客力が徐々に低下。平成21年には井筒屋が閉店し、商業地としての力が衰えていた。

一方、新幹線開通を契機として市はMICE機能に対応した交流施設の建設を計画していた。また、老朽化していた久留米市民会館を文化芸術の発信地として再建する必要にも迫られていた。

こうした状況を踏まえて市が決定した方針は、「市民会館を建替え、文化芸術機能とMICE機能に対応した拠点施設とすること」「建設場所は中心市街地である六ツ門地区とすること」「隣接する六角堂広場と一体的に整備すること」であった。

久留米シティプラザ副館長の宮原氏によれば「この時代になぜ箱物か、という反対もあったのですが、魅力的なコンテンツを上演できる水準の高い劇場やホール等を備え、MICE需要に対応できる複合施設をまちなかに建設し、広域から、ときには全国から人を集め、隣接する商店街もにぎわう拠点施設にしたいと考えました。」開館から2年目を迎えた久留米シティプラザだが、5年を目途に市直営で運営管理にあたるという。直営にした理由は、シティプラザの運営管理だけでなく、六角堂広場の活用や商店街の活性化策を連携させながら相乗効果を図り、多角的に行うためとのことだ。

シティプラザの共用部は公演のない日も含め毎日朝8時半から夜22時半まで開放しており、市民の姿が見られる。「日常的に使ってもらえることが中心市街地にある意義」と宮原氏は言う。

開館から11カ月の合計来場者数は53万4千人、大ホールの稼働率約8割を実現し、地域経済への波及効果は14億円という調査結果が出た。実際、商店街の空き店舗に新たな飲食店が進出し始めている。

生まれ変わった六角堂広場は人が集まり行き交う地域の拠点

平成15年に整備された六角堂広場は、長らく市民の憩いの場、イベントスペースとして定着していた。しかし屋根がなかったため天候の影響を受けることが多く、商店街の客足が低下するとともに利用者も減少。久留米シティプラザと一体整備することになった。

膜屋根を張り全天候型に生まれ変わった六角堂広場は、設備面も充実している。東面に昇降式ステージが設置され、シティプラザの大階段がそのまま観覧席になる。床面には十分な電気・ガス・給排水設備が整っている。広場自体は開放空間なので、火の使用や煙を出すことも可能だ。4回目を迎えた「久留米たまがる大道芸」は九州最大級のイベントだが、広場で火を吹く芸をやったり、商店街を舞台に展開することによって、さらにスケールを増したとのことだ。

広場に併設の「カタチの森」は、カフェもある子育て支援施設だが、子供を対象にした演劇やワークショップも開催される。買い物のついでに立ち寄るだけでなく、ここで時間を過ごす母子連れも多い。開口部が広場に面しており、開け放って一体利用ができる。

にぎわい創出効果が格段に増した広場とシティプラザの一体利用

六角堂広場は元々第三セクターの㈱ハイマート久留米（以下、まちづくり会社）が運営にあたっている。隣接する商店街との結節点でもあるが、土日は毎週イベントを、平日朝10時から16時まで、子供の遊び場「まちなか遊園地」を開催している。

MICEのひとつ、学会の誘致にも力を入れている。「久留米大学から高い評価を得ています。ホールで学会を開き、そのまま降りて六角堂広場を貸し切ってブッフェスタイルの懇親会、二次会三次会は隣接する商店街で飲むなど、動線が短いのが利点です。かつては学会から懇親会場まで移動する必要があり、懇親会の出席率が低かったそうです。」と㈱ハイマート久留米の辻氏。商店街連合会の事務局がまちづくり会社内に置かれ、商店街との連携が密だ。六角堂広場とシティプラザの施設を一体活用することによって、人が集まり、歩き、交流する動線に厚みが出た。

「シティプラザ前」と改称されたバス停には市の内外からのバス路線が集中し、福岡空港からも直行バスがある。久留米シティプラザと六角堂広場の求心力は、確実に増している。

●ザ・グランドホールのステージとバルコニー席※
©大竹央祐

●カタチの森
六角堂広場に面したカタチの森の開口部はアコーディオンドアを開放して一体的に利用できる。

（中央）久留米市市民文化部久留米シティプラザ副館長
宮原義治氏
（右）久留米市市民文化部久留米シティプラザ総務課
山田進一郎氏
（左）㈱ハイマート久留米常務取締役　辻文孝氏

●まちなか遊園地 ※
特別なイベントのない日は毎日、広場が手づくり遊園地になる。

❷カタチの森・六角堂広場（左側）と商店街アーケード

●久留米たまがる大道芸2017（平成29年11月）※
©仲朝芳
開放的な空間で、大規模な企画が展開できる。

●久留米楽衆国祭り（平成29年4月）※
久留米シティプラザ開館1周年事業を併催。

●整備前の事業地区（敷地配置図）

❹昇降式ステージ※

❺六ツ門テラス

❸カタチの森

※の写真は久留米市提供

久留米シティプラザ・六角堂広場施設概要

ザ・グランドホール／優れた音響効果を誇る4層吹抜けの多目的ホール（1,514席）
久留米座／舞台装置が充実した劇場（399席）
Cボックス／床の高さや舞台、客席が可変式の多目的スペース（144席）
スタジオ／音楽やダンスの練習スタジオ（4室）
展示室／作品展や展覧会、各種展示会に利用できる（約430㎡・3分割可能）
会議室／サークル活動からコンベンションまで対応（大：中：小：各3室）
和室／路地庭や炉、水屋を備えた格調高い和室（京間8畳3室）
六角堂広場／膜屋根、昇降ステージを備えた全天候型の多目的広場（約1,320㎡）
カタチの森／アートユニットtupera tuperaがプロデュースしたフリースペース（約310㎡）
六ツ門テラス／オープンカフェとしても利用できる憩いの空間
駐車場／B1・B2F（114台）

●共用部ミーティングコーナー

●久留米シティプラザ建物外観 ※

久留米シティプラザの沿革

平成23年 2月 （仮称）総合都市プラザ整備の方向性発表
5月 市議会で「総合都市プラザ調査特別委員会」を設置
平成24年 12月 六ツ門8番街地区市街地再開発組合設立
平成25年 3月 管理運営計画策定（関係機関、市民団体など約90参加）
10月 工事着手
平成28年 4月 久留米シティプラザ開館

MICEとは、企業等の会議（Meeting）、企業等の行う報奨・研修旅行（インセンティブ旅行）（Incentive Travel）、国際機関・団体、学会等が行う国際会議（Convention）、展示会・見本市、イベント（Exhibition/Event）の頭文字のことであり、多くの集客交流が見込まれるビジネスイベントなどの総称。

❶久留米シティプラザの大階段をのぞむ六角堂広場全景 ※

SPOT 北海道函館市

まちなみを活かしたにぎわい創出イベント

illumination

全国各地で少子高齢化と人口減少が進むなか、いかにまちのにぎわいを創出するかを、観光誘致により図っている自治体も多い。

日本人観光客は国内人口減少に伴い、今後全体的に縮小する見込みが高いが、訪日外国人観光客は全国で年々増加しており、平成2年は323万人だったが、平成25年以降前年比20％以上の急激な伸びをみせ、平成28年は過去最高の2403万人にまで達し、平成29年も更に20％を上回る増加が見込まれる。

一般的に観光地では、日帰りに比べ消費金額単価の高い宿泊観光が望ましく、年間を通じ安定した観光客の確保が一定の雇用・施設維持に必要である。

特に地方都市は、季節により観光客が増減することが多く、繁忙期と併せ閑散期の対応を検討しなくてはならない。

世界の三大夜景とも称され、観光人気が高い函館市でも、夏季と比較し冬季については観光客は減少する。ここでは函館の冬季のにぎわい創出をしているイベント『はこだて冬フェスティバル』と『はこだてクリスマスファンタジー』を紹介する。

▼市の概要

函館市の人口は、昭和55年をピークに34万5千人から平成28年26万3千人と減少。一方で平成28年3月に北海道新幹線が開通し、空港、港と併せ交通網の充実により北海道の玄関口になっている。

市の商業の中心地は、日本初の国際貿易港として、横浜、長崎と同時に開港した港周辺地区から発展し、駅近くの函館駅・大門地区、五稜郭地区と順次推移した。

なお昭和9年の函館大火により、焼失区域内の計画幹線道路の幅員拡幅と、防火帯として、市街を東西、南北で縦断するグリーンベルトが設定され、防災を考慮した街並みとなっており、戦前における地方都市の稀有な都市計画実施例が現在の観光客誘致に役立っている。

▼冬季にイベントをつくりたい『はこだて冬フェスティバル』

元々冬季に大きなイベントがなかった函館市は、市民の各団体で小さな冬のイベントを行なっていたものを、昭和61年より市が主体となり引継ぎ、冬場の観光誘致のイベント『はこだて冬フェスティバル』のひとつとして『はこだてイルミネーション』を開催し、今期で33回目を迎えた。

教会や歴史的な建物が建ち並ぶ元町地区のまちなみと坂道のロケーションを生かした約16万個の電飾イルミネーションで、12月から2月末までの期間中、二十間坂、八幡坂と開港通りにて、日没から22時まで幻想的な光の回廊で函館の冬の夜を美しく彩っている。

現在『はこだて冬フェスティバル』（期間12月1日～2月末）は、『はこだてイルミネーション』のほか、平成26年から始まった『函館駅前広場イルミネーション』、バレンタインデー前週末3日間に函館港豊川埠頭沖で約2000発の花火を打ち上げる『函館海上冬花火』、金森赤レンガ倉庫イベント広場で行われるキャンドルイベント『みんなで作ろう函館夜景』、その他協賛事業として『金森キャンドルバレンタイン』、『チャリティー茶会』、『光の夜市』を開催し函館の冬を盛り上げている。

多数の地元企業が本イベントの主なスポンサーとなっており、実行委員会としてはスポンサーの理解を得られるよう常にイベントの価値向上を目指している。来函観光入込客数は昭和60年に年間272万人で12月～2月に関しては年の全体の4.6％だったが、平成28年は年間560万人の内12月～2月は14.3％となっている。

▼市民とつくるにぎわい創出『はこだてクリスマスファンタジー』

昨年開催20回目を迎えた『はこだてクリスマスファンタジー』は、平成10年に函館青年会議所のメンバーが発案し、市の姉妹都市であるカナダ東海岸最大の文化経済都市ハリファックスから毎年寄贈される巨大ツリー「幸せのもみの木」を、ベイエリア赤レンガ倉庫周辺の海上に設置し、函館のクリスマスを艶やかに彩り、期間中毎日18時からツリー点灯と花火打ち上げを実施している。20回記念の平成29年は花火のグレードアップとレーザーを使用し更なる演出を図っていた。

運営は多数の希望者から選ばれた100名近くのボランティアで、高校生から高齢者と幅広い年齢層の人材で対応している。創設期の青年会議所のメンバーは各々自社の経営に携わる年代となり、若い世代への運営のバトンタッチを意識しなくてはならない時期にある。地方都市で抱える若年層の大都市圏への流出問題に対し、地元愛につながるイベントでの世代を超えたコミュニティに属することで、地元への定住を促し、ひいてはにぎわい創出につなげている。

▼他都市との観光連携

函館市では近年の台湾、中国との国際定期便の就航に加え、平成28年度は新幹線開通の初年度ということもあり、平成32年度の目標540万人を20万人超える観光入込客数があった。国内道外からの内訳として青森県が約20％と最多であり、他の東北の県からも多い。今後は、平成42年北海道新幹線が札幌まで延伸開通（予定）し、約1時間で函館と札幌を結ぶ。既に新幹線で結ばれている青森（所要1時間）や仙台（所要2時間30分）と連携し、観光ルートの形成による相乗効果で国内外の観光客の増加を目指す。

将来的に市の人口が18万人を割る予測もあるが、アンケート等で市民意見の聴取を細かに行い、更にまちの資源を市民と有効活用をしていこうという市の姿勢と、にぎわいのなか非常にまちなみとグルメを満喫している観光客をみて市の今後に明るさを感じた。

❷函館山ロープウェイと函館市のまちなみ。平成26年に導入された5代目ロープウェイ。

❶五稜郭公園
約150年前に築造された西洋式城郭・五稜郭跡（国の特別史跡）が、現在は公園になっている。

写真番号●はこだて冬フェスティバル●はこだてクリスマスファンタジー

❸はこだてイルミネーション　二十間坂

❹はこだてイルミネーション　八幡坂

❺はこだてイルミネーション　開港通り

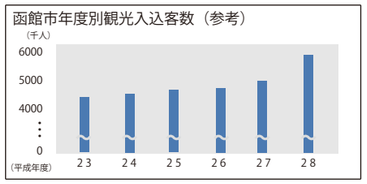
❻函館駅前広場イルミネーション

❼函館海上冬花火　函館港豊川埠頭沖

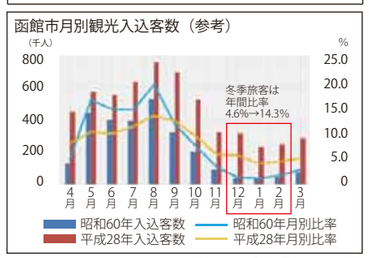
❽はこだてクリスマスファンタジー

●一般社団法人函館国際観光コンベンション協会
課長代理 土田正則氏（協会が所在する旧英国領事館会議室にて）

函館市年度別観光入込客数（参考）



函館市月別観光入込客数（参考）



出典資料：北海道経済観光局・函館市

《観光入込客数》
平成21年に国土交通省観光庁が策定した観光客統計の共通基準。観光入込客とは、「日常生活圏以外の場所へ旅行し、そこでの滞在が報酬を得ることを目的としない者」としており、観光入込客数とは「都道府県の観光地点を訪れた観光入込客をカウントした値」。

●函館市都市建設部（左より）景観政策担当課長 長谷山裕一氏、まちづくり景観課主査 上田亮平氏

【函館市のまちづくり景観将来構想】

函館市は、平成28年度から15年間を重点推進期間とする長期まちづくり計画『ガーデンシティ函館』の実現を目指す。20年以上かけて整備してきた西部地区の坂道や歴史的建造物などの町並みが、今では函館観光の中心的存在となっており、本計画では「歴史と景観に配慮したデザイン性の高い都市空間の形成」「花と緑にあふれた美しいまちづくり」「地区の特性に配慮した統一感のある町並みの形成」「既存の観光資源の磨き上げと新たな観光資源の創出」を主要施策として函館全域に美しい都市空間整備を広げることとしている。

なお函館市は、平成29年に国土交通省より3ヵ年「景観まちづくり刷新モデル地区」として全国10地区のひとつに選定された。

また国内初の国際貿易港として諸外国の文化が流入し、異国情緒漂う町並みが形成されている西部地区では、歴史的建築物の保存とともに、近年増加している空家対策を重点的に実施している。

●函館市電（ハイカラ號）
函館の中心市街地を走るレトロデザインのハイカラ號。昔の商店を再現した旧金森洋物店の前で。

●北海道新幹線
函館～東京間の鉄道旅が約4時間半と時間短縮。

※人物以外の写真は函館観光画像ライブラリー使用。

Report
■海外視察レポート

ドイツ諸都市における産業構造の転換に対応した都市・地域再生について

当協会及び一般社団法人再開発コーディネーター協会共催による「海外住宅・都市開発事情視察」を当協会理事長で筑波大学名誉教授の大村謙二郎を団長として、2017年8月29日から9日間にわたって実施した。今回の視察では表題のテーマのもと、ドイツのルール・ライン地域の諸都市とEUの金融の中心としてダイナミックに変化するフランクフルトを訪問した。各都市の主な視察先について以下に紹介する。

■ドイツにおける産業構造の転換

第二次大戦で多くの都市が壊滅的打撃を受けた日本とドイツの両国は戦後の混乱状況をくぐり抜けて、いち早く復興、経済成長を達成してきた。その背景には、ものづくり産業に強みを発揮し、工業力で都市が成長、発展したことがあった。

しかし、70年代に入って、深刻化する公害問題、環境問題、また2度の石油危機を通じて省エネルギー意識が高まるとともに、途上国の追い上げもあって、今回訪問したルール工業地域の中核都市であるエッセン、ドルトムント、デュイスブルクの石炭・鉄鋼産業が衰退し、都市の工業が合理化、再編されて都市部から撤退する事態が生じてきた。

また、モータリゼーションの進展等の交通、物流体系の再編、合理化により都市の港湾部、鉄道貨物ヤードなどの用地が不要となる事態が生じてきた。1980年以降、そのような産業構造の転換に対応する形で、様々な都市再生、地域再生プロジェクトが行なわれている。

■都市のブランド力を高める注目プロジェクト

近年、欧州の諸都市では世界的に著名な建築家を起用して象徴的な建築プロジェクト、都市デザインプロジェクトを展開して都市のブランド力を高めようとしている。また、それぞれの都市の戦略的な開発プロジェクトについては国際的なコンペを実施して都市の認知度を高めようとしている。

今回訪問したデュイスブルク、デュッセルドルフ、ケルン、フランクフルトは著名な建築家が中心市街地マスタープラン立案などに関わった典型例である。

■ルール地域が環境先進都市へ

ルール地域が都市・地域計画分野で国際的に著名になったのは1989年から99年にかけて開催されたIBAエムシャーパークを通じてである。IBAとは国際建築博覧会の略称であり、ドイツでは20世紀初頭から、国際的に建築活動を展示する方式が各地で展開されてきた。

ドイツ最大の州であるノルトライン＝ヴェストファーレン州（以下NRW州）は経済的構造転換に苦慮しているルール地域の再生を図ることを企図して広域的なIBAを展開した。

同州は新たな産業の核として環境先端技術の開発、発展を目指して、環境汚染が深刻であったルール地域のイメージの刷新を図った。この地域のルール川及び工業化による産業排水で汚染が深刻であったエムシャー川流域の都市に呼びかけて、水と緑、環境、都市計画を主要なテーマとして、イノベーティブなハード、ソフトのプロジェクトを展開し、イメージの転換を図った。

■大都市圏の中核2都市

ドイツ政府は欧州での都市間競争、地域間競争に対応するために大都市圏を中心とした様々な空間的政策、経済政策の一体化を推奨している。

1995年に形成された大都市圏ライン・ルールはドイツ最大の巨大都市圏であったが、2017年2月、大都市圏ラインラントが結成され、分離することになった。

大都市圏ラインラントは一体的な経済空間として構成自治体が連携し、グローバルレベルの競争力を強め、魅力を高めることを大きな目的としている。なかでも中核的な役割を果たすのがデュッセルドルフとケルンである。

■フランクフルトがEUの金融センターへ

フランクフルトはマイン川沿いに発展してきた都市である。第二次大戦で東西ドイツが分断され、ベルリンが陸の孤島になったことにより、ドイツの金融の中心はフランクフルトに移ることになった。

近年は英国の欧州連合離脱を控え、ロンドンシティーに本拠を置く金融機関が、金融センターとしての機能が整っているフランクフルトを新たな拠点とする動きがみられる。

デュッセルドルフ Düsseldorf

デュッセルドルフはNRW州の州都で政治・経済の中心地。日系企業の欧州拠点が集中し日本人が多いことでも知られる。コンパクトな都市を目指して都心部の再開発を進めている。特に産業構造の転換に対応して、工業・港湾機能から住宅・業務機能への転換を進めている。

■メディエン・ハーフェン

ライン川に面した港湾地区の再開発。1960年代から産業構造の変化に伴い、港湾機能（運輸・倉庫等）が徐々に縮小され、用途転換が課題となった。1974年に港湾地区の再開発計画を策定し、大きく4期に分けて段階的に再開発を行なっており、概ね3期まで完成した。

1989年から1999年にかけてオフィスビルを中心として開発された2期エリアがメディエン・ハーフェンの中枢部であり、メディア、広告、ファッション等の企業が進出している。特に2期の当初に建設されたフランク・ゲーリー設計によるオフィスビルは他に類を見ない独創的な建築であり、メディエン・ハーフェンの広告塔の役割を果たしている。

●メディエン・ハーフェンのオフィス・商業施設
広告物・看板を制限し、建築デザインやアートにより独自性を出している。

1993年から2000年にかけて開発された3期エリアではオフィス、ホテル等が建設された。また、歩行者用の橋が新設され、単なる通過空間となるだけでなく滞在空間となるように設計されている。

また港湾地区という特性を活かすため、歴史的建築物やクレーンなどが文化財として保存・活用されている。

●フランク・ゲーリー設計の建築
ステンレスの外壁を持つ建物は、反射により遠くからも認識できる。

■ケー・ボーゲン

市中心部の再開発プロジェクト。市内随一の高級ショッピングストリートであるケーニクスアレー（略称ケー）と市民の憩いの場である公園ホーフガルテンをつなぐ場所にある。従前は路面電車及びバスのターミナルとして使われていた。

市の中心部にありながら、当地区一帯は戦後の自動車交通優先の都市計画により、道路が市街地を分断する状況となっていた。本プロジェクトはこれを転換し、緑のネットワーク＝歩行者ネットワークを形成し、また建築を整備して市街地をつなげることを目的とした。

基盤整備として、周囲の道路を地下化し、路面電車の一部も地下鉄化することにより、歩行者ネットワークを形成した。また、ケーニクスアレーの運河とホーフガルテンの池を結ぶように水路を整備し、水辺空間もネットワーク化している。

また、道路等の地下化により生み出された宅地部分は建築規模及び用途を市が決定した上で、民間事業者の企画提案を選定し、条件付で土地を譲渡し、ダニエル・リベスキンド設計による独創的な外観の商業施設が建てられた。総投資額は10億ユーロで、うち2棟の建築で4億ユーロである。商業施設は好調であるが、デュッセルドルフ一極集中で周辺都市の商業に影響があるとも言われている。

●ケー・ボーゲンの商業施設とホーフガルテン（右側）

デュイスブルク Duisburg

デュイスブルクはライン川とルール川の合流地域に位置し、欧州最大の内陸港を有しているドイツ最大の鉄鋼産業都市。19世紀初頭には人口5千人程度の小さな街であったが、多くの港湾施設・造船所、および関連する貿易商社が設立されて発展した。しかし、基幹産業である石炭・鉄鋼産業が衰退したため、多くの失業者が発生し、人口も減少した。同市は都市再生を目的に著名な建築家であるノーマン・フォスターが中心市街地および内陸港再生のマスタープランを策定し、都市のブランド力を高めている。

■インナーハーフェン（内陸港）

インナーハーフェンは89haの欧州最大の内陸港で、中心市街地の北側に位置し、19世紀には鉄鋼業や製粉業などの中継地点として栄えた。しかし、20世紀にはモータリゼーションの進展等の交通・物流体系の再編、合理化により、港の経済的重要性が失われてきたため、市は1991年にインナーハーフェンをリニューアルする国際コンペを実施し、ノーマン・フォスターが内陸港再生のマスタープランを策定した。

ファイブ・ボートは、ニコラス・グリムショウ&パートナーズによるデザインで2003年に建設。オフィス・商業の複合施設。本建物の特徴は5隻のボートをモチーフとした形状で、オフィスの90%が水辺を見渡すことが可能。

●インナーハーフェンの複合施設「ファイブ・ボート」

■デュイスブルク・ノルト風景公園

IBAエムシャーパークの産業施設公園化プロジェクトの一つで、200haの産業遊休地を緑地と産業構造物からなる大規模公園として整備した。

●デュイスブルク・ノルト風景公園

エッセン Essen

エッセンはルール工業地域の中核都市で、鉄鋼大手のティッセンクルップ社が本社を置く。この地域を支えていた石炭・鉄鋼産業が衰退し、汚染された環境や破壊された景観が負の遺産として残されたが、IBAエムシャーパーク事業が1989年に始まり、エッセンの都市再生もその事業の一つである。エッセンは都市の環境問題に先駆的な取り組みを行っており、2010年に欧州文化首都に選定され、2017年には欧州グリーン首都賞を受賞した。

ルール地方では、環境に優しい未来の都市交通を目指すため、自転車専用高速道路（自転車アウトバーン）が整備された。道路はデュイスブルク、ボーフム、ハムなどドイツ西部の都市を結ぶ計画で、2020年から2025年までに全体が完成する予定。全長は100km以上となる。整備にあたっては、かつて石炭を輸送した鉄道を転換して活用している。

●ドイツ初の自転車専用高速道路〈提供：エッセン市〉

■クルップパーク

クルップパークはティッセンクルップ本社屋の西側に広がる敷地面積23haの公園で、労働者と周辺住民が余暇を楽しむための人工湖や遊歩道が2007年から2009年にかけて整備された。公園を整備する前はクルップ社の製鉄工場跡地であった。整備主体はエッセン市で、ティッセンクルップ社から土地を購入して整備した。

●クルップパークの人工湖

■マルガレーテンヘーエ

ルールの鉄鋼王であったクルップは市内に多数の社宅を建設した。マルガレーテンヘーエはクルップが妻マルガレーテの名を冠して建設した住宅地である。マルガレーテンヘーエは1906年から1938年にかけ、メッツエンドルフの設計により約50haの田園都市として建設された。この住宅地は第二次世界大戦で被害を受けたが、当初の形に再建されている。

●マルガレーテンヘーエの住宅

ドルトムント Dortmund

NRW州に属するルール地方の代表的な都市である。古くからの交通の要衝で、中世より貿易都市として栄えた。石炭と鉄鉱石を産出し19世紀中頃から石炭・鉄鋼業が発展したが、現在は閉鎖されている。また、世界有数のビール産地としても有名で、多くのビール会社の醸造所が稼働していたが、1社に統合された。近年はサービス・ハイテク産業に力を入れている。

●Uタワー
1927年に建設されたドルトムント最初の高層ビル。元々はユニオンビールの醸造所であったが、再開発されランドマークとなっている。

ドルトムントは長年、工場労働者の都市として発展してきた経緯があり、高等教育機関の整備が不足がちであったが、1960年代に入り、整備が進み、ドルトムント工科大学の空間計画学部は都市計画プランナーの教育、研究機関として欧州でもトップクラスの水準を誇る。

■フェニックスプロジェクト

市南部のフェニックス製鉄所跡地の再開発。製鉄所は東と西に分かれ、その間に工場の労働者向け住宅地ヘルデ地区が位置する。2001年に最後の鉄鋼工場が閉鎖し、約200haの産業跡地が発生した。その後住宅、オフィス、レクリエーションを軸とした複合型再開発が持ち上がり、東側（フェニックス・ウエスト）に分けて開発された。

●フェニックス・イースト地区

●フェニックス・イースト地区

イースト地区は面積が約96haあり、かつては沼地だった場所に面積24haの人工湖フェニックス・シーを造成した。湖の周囲に高級住宅、オフィス、レストラン等を配置し、休日には多数の観光客が訪れる。

●木組みの家

フロイデンベルク Freudenberg

フロイデンベルクはケルンの東方、約70kmに位置する小さな町。旧市街に17世紀に建てられた木組みの家が整列して美しい街並みが広がっている。

●フェニックス・ウエスト地区

●フェニックス・ウエスト地区

ウェスト地区は面積約110ha。ドルトムント工科大学と連携し、IT、ナノテクノロジー等の産業を集積。溶鉱炉等製鉄所跡地の産業遺産の一部をフェニックス・パークとして開発し、レクリエーション施設として保存している。

ケルン Köln

ドイツではベルリン、ハンブルク、ミュンヘンに次いで4番目に大きな都市。多くの歴史的建築物を復元した結果、新旧の建築が独特の都市景観を呈している。中心市街地のマスタープランはアルベルト・シューペア&パートナーが策定した。

■ラインアウハーフェン地区

ライン川沿い港湾跡地を活用した都市再生プロジェクト。プロジェクトの計画は90年代の都市デザインコンペで始まり、オフィス、ホテル、高級賃貸住宅、文化施設が建設された。3つのクレーンハウスがこの地区のランドマークである。

クレーンハウスの形状は逆L字型で、貨物を船に積み込むために使用されたクレーンをモチーフにした。2008年に3つの独特の建物が完成した。設計はアルフォンズ・リンスターとBRTアーキテクツによる。「MIPIM AWARD 2009」受賞。

●ラインアウハーフェンの複合施設「クレーンハウス」

●ケルン大聖堂

ゴシック様式の建築物としては世界最大のケルン大聖堂。大聖堂の維持管理費用は年間1000万ユーロに達している。

●ケルン大聖堂

マールブルク Marburg

マールブルクはヘッセン州中央部の小都市。1527年創立のフィリップ大学マールブルク（通称マールブルク大学）があり、世界中から学生が集まる大学都市である。

●エリーザベト教会
エリーザベト教会は、1235年から1283年にかけて建てられたドイツで最初のゴシック様式の教会であり、ケルン大聖堂の設計にも影響を与えたとされる。

フランクフルト Frankfurt am Main

フランクフルトは、ヘッセン州最大の都市でありベルリン、ハンブルク、ミュンヘン、ケルンに次ぐ第5の都市である。現在は欧州中央銀行、ドイツ連銀をはじめ、銀行、証券会社等が集積立地する国際金融都市として発展している。また、欧州のハブ空港としての役割を果たすフランクフルト空港、欧州最大級の鉄道ターミナルであるフランクフルト中央駅を擁し、国際的な交通の重要結節都市でもある。また、メッセ・フランクフルトは、世界最大の見本市会場の一つである。

フランクフルトはドイツの他の大都市と比較して大きな特色がある。それは超高層ビルが都心の旧市街地を取り巻く環状道路沿いに林立して独特の都市景観を形成している点である。同市はこの超高層ビル群の都市景観こそが魅力であると認識して、活発な都市広報活動を行っている。

●フランクフルトの高層ビル群①

●フランクフルトの高層ビル街②
ニューヨークのマンハッタンと似ていることから「マインハッタン」と呼ばれる。

また、80年代以降、文化政策による都市発展にも注力しており、旧市街地南側のザクセンハウゼン側にあるマイン川沿岸に博物館や文化施設を集積させ、文化都市フランクフルトの名を高めようとしている。

●ドイツ建築博物館

■レーマーシュタット

市内中心部から地下鉄で15分の郊外住宅団地。団地は建築・都市計画の専門家であるエルンスト・マイが設計し、1925年から30年にかけて建設された。80年も前に建てられた低層の団地が今でも賃貸住宅として人気を維持している。

●商業施設「マイツァイル」外観
建築家マッシミリアーノ・フクサスが設計し、2009年に開業。前面と屋根がガラス張りの商業建築。

■ジグザグハウゼン

レーマーシュタット同様にエルンスト・マイの設計により、1926年から1927年にかけて建設された中心市街地近郊の集合住宅。通りに面した壁面がジグザグに連なる。外壁にはカラーコードが規定され外観の統一が図られている。洗濯物は中庭や屋上に干すことで景観に配慮。

●レーマーシュタット庭付き賃貸住宅
周辺に広がるテラスハウスでは石垣に囲まれた大きな裏庭の空間が住宅の周りに確保されていて、住人がそれぞれに手入れした庭園が連なっている。

●ジグザグハウゼン外観

■リードベルク計画

市内中心部から約8キロの北西部の新規ニュータウン計画。2001年から工事が開始され、2020年に完成予定の大規模開発。総面積267haの内、住宅地89ha、大学のキャンパス・研究関連施設22ha、緑地・公園等139ha、公共施設・スポーツ広場17haとなっている。幼稚園、小学校・高校、ショッピングセンターなども所在する。

●リードベルクの研究施設

■オイローパ・フィアテル（ヨーロッパ地区）

オイローパ・フィアテルは、ガルス地区の旧鉄道貨物操車場跡地を再開発中の地区。1999年にアルベルト・シュペーア事務所がマスタープランを策定した。この地区は、見本市会場に隣接し、2022年にオフィス、ホテル、集合住宅、学校、公園、ショッピング施設が完成する予定。

●見本市会場近くの複合施設「スカイラインプラザ」
2014年開業のショッピングモール、オフィス、会議場、集合住宅、スパで構成される複合施設。写真はショッピングモール。

6 大手町一丁目第3

7 京橋二丁目西

8 勝どき五丁目

9 六本木三丁目東

10 糀谷駅前

11 立川駅北口西

12 鹿島田駅西部

13 大和駅東側第4

14 大手通表町西

17 福井駅西口中央

18 大垣駅南街区

20 明石駅前南

21 広島駅南口Ｂブロック

22 広島駅南口Cブロック

1 目黒本町五丁目24番

2 寺家町周辺

※平成29年度市街地再開発等功労者表彰 受賞地区の一部

市街地再開発事業

	地区名	所在地	施行者	地区面積（ha）	延床面積（㎡）	主要用途	完了（年月）
1	函館駅前若松	北海道函館市	個人	0.48	17,777	住宅、公益施設、店舗	平成 29 年 3 月
2	立町二丁目5番	宮城県石巻市	組合	0.30	5,739	住宅、高齢者施設、店舗	平成 28 年 9 月
3	中央一丁目14・15番	宮城県石巻市	組合	0.50	8,533	住宅、高齢者施設、事務所	平成 28 年 9 月
4	武蔵浦和駅第1街区	埼玉県さいたま市	機構	2.95	74,298	住宅、店舗、公共公益	平成 29 年 1 月
5	柏駅東口D街区第1	千葉県柏市	組合	0.83	44,087	住宅、店舗、公共公益	平成 28 年 4 月
6	大手町一丁目第3	東京都千代田区	個人	1.12	207,576	事務所、ホテル、店舗	平成 28 年 4 月
7	京橋二丁目西	東京都中央区	組合	1.04	118,941	事務所、店舗、観光情報センター	平成 28 年 10 月
8	勝どき五丁目	東京都中央区	組合	1.90	164,889	住宅、高齢者施設、店舗、保育所	平成 28 年 12 月
9	六本木三丁目東	東京都港区	組合	2.70	210,490	事務所、住宅、店舗、変電所	平成 28 年 10 月
10	糀谷駅前	東京都大田区	組合	1.30	43,091	住宅、店舗、子育て支援施設	平成 28 年 12 月
11	立川駅北口西	東京都立川市	組合	0.70	59,123	住宅、店舗、窓口サービスセンター	平成 28 年 7 月
12	鹿島田駅西部	神奈川県川崎市	会社	2.28	93,722	住宅、店舗	平成 28 年 10 月
13	大和駅東側第4	神奈川県大和市	組合	1.22	26,003	芸術文化ホール、図書館、生涯学習センター、店舗	平成 28 年 7 月
14	大手通表町西	新潟県長岡市	組合	0.55	16,978	住宅、事務所、有料老人ホーム、社会福祉センター	平成 28 年 9 月
15	総曲輪西	富山県富山市	組合	1.04	27,290	映画館、店舗、ホテル、住宅	平成 28 年 6 月
16	片町A	石川県金沢市	組合	0.60	15,142	店舗、結婚式場、事務所	平成 28 年 5 月
17	福井駅西口中央	福井県福井市	組合	0.70	34,353	住宅、多目的ホール、博物館、ボランティアセンター、店舗	平成 28 年 4 月
18	大垣駅南街区	岐阜県大垣市	組合	1.54	24,824	住宅、店舗、事務所、子育て支援施設	平成 28 年 8 月
19	掛川駅前東街区	静岡県掛川市	組合	0.90	14,902	住宅、店舗	平成 28 年 7 月
20	明石駅前南	兵庫県明石市	組合	2.19	65,850	住宅、店舗・事務所、子育て支援施設、図書館	平成 29 年 2 月
21	広島駅南口Bブロック	広島県広島市	組合	1.40	125,230	住宅、店舗、事務所、総合福祉センター	平成 28 年 8 月
22	広島駅南口Cブロック	広島県広島市	組合	1.90	99,970	住宅、店舗	平成 29 年 1 月

防災街区整備事業

	街区名	所在地	施行者	街区面積（ha）	延床面積（㎡）	主要用途	完了（年月）
1	目黒本町五丁目24番	東京都目黒区	組合	0.06	1,432	住宅、店舗	平成 28 年 10 月
2	寺家町周辺	兵庫県加古川市	組合	0.80	24,982	住宅、事務所・店舗	平成 28 年 6 月

優良建築物等整備事業

	地区名	所在地	事業タイプ	地区面積（ha）	延床面積（㎡）	主要用途
1	北2西3北	北海道札幌市	優良再開発型・環境	0.35	18,817	事務所、店舗
2	函館本町	北海道函館市	優良再開発型・共同	0.39	15,850	店舗、共同住宅
3	古川一丁目12番	青森県青森市	優良再開発型・環境	0.17	6,361	住宅、駐車場
4	八日町二丁目	宮城県気仙沼市	優良再開発型・共同	0.05	986	店舗、公営住宅
5	南町一丁目	宮城県気仙沼市	優良再開発型・共同	0.24	3,792	店舗、公営住宅、福祉施設
6	南町二丁目	宮城県気仙沼市	優良再開発型・共同	0.68	3,750	店舗、公営住宅
7	魚町二丁目	宮城県気仙沼市	優良再開発型・共同	0.27	1,509	店舗、公営住宅
8	上町	秋田県能代市	優良再開発型・環境	2.37	9,050	庁舎
9	平堂根町	福島県いわき市	優良再開発型・共同	0.37	15,058	共同住宅、クリニック、駐車場
10	大島四丁目4番地	神奈川県川崎市	優良再開発型・環境	0.26	5,241	共同住宅、店舗
11	新発田市庁舎	新潟県新発田市	優良再開発型・環境	0.57	12,995	市庁舎
12	塩尻駅前	長野県塩尻市	優良再開発型・共同	0.14	704	店舗、共同住宅
13	岡崎市シビックコア	愛知県岡崎市	優良再開発型・共同	0.10	4,395	共同住宅
14	伊勢市駅前A	三重県伊勢市	優良再開発型・環境	0.27	3,305	ホテル、店舗
15	乙吉町	島根県益田市	優良再開発型・環境	2.78	21,270	病院
16	二番町三丁目南第一	愛媛県松山市	優良再開発型・共同	0.10	3,027	店舗、事務所、賃貸住宅
17	飯塚本町東	福岡県飯塚市	優良再開発型・共同	0.31	7,412	共同住宅
18	新世界（第二期工区）	福岡県久留米市	優良再開発型・共同 市街地住宅供給型・中活	0.21	10,942	住宅、店舗、駐車場
19	下通A	熊本県熊本市	優良再開発型・共同	0.41	18,675	商業、業務
20	岩崎3丁目東	宮崎県日南市	優良再開発型・共同	0.29	6,463	店舗、公共公益施設、住宅
21	岩崎3丁目西	宮崎県日南市	優良再開発型・共同	0.17	4,688	店舗、駐車場

平成28年度の事業完了地区（国土交通省資料及び当協会調べ）